

報 特 攻

平成10年8月

靖国神社例大祭

靖国神社では毎年春秋の二回例大祭を齎行している。本年も4月21日から23日までの三日間、盛大かつ厳肅に執り行はれた。22日の当日祭には日本遺族会、神社本庁、英霊にこたえる会、靖国神社奉賛会の代表や崇敬者総代等をはじめ各界代表七五九名が参列し、神事は肅々と進められた。宮司の祝詞奏上について、参列者が奉迎申上げる中、園池美作掌典が勅使として参向、御幣物を奉献し、大御心のまにまに御祭文を奏上せられた。

以上の事実を顧み、御祭神の御心を推察して思うことがある。御親拝こそないが、いつも勅使御差遣、御幣物を賜ることは感銘を覚えるが、早く御親拝の実現する世にしなければならぬ

六月の拝殿揭示は

昭和田皇御製
ここのそぢへたる宮居の神がみの



御幣物を奉持して参向される勅使

国にささげし いさををぞおもふ
靖国神社創立九十年祭（昭和34年）の御製
次はお国の為命捧げた英霊を祭るのに政府代表の姿は絶えてない。マッカーサーの与えた憲法に禁じられていくというだらう。また最高裁が昨年のような判決を出すと思うだらう。しかし戦死したら靖国神社に祀るといふことは、国が兵士に約束したことではな

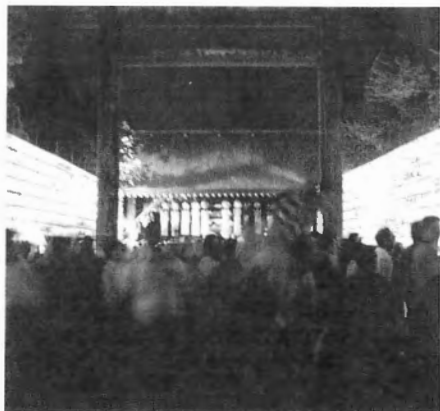
いか。戦後の合祀は神社が独自に行つたもので、最近では役所は調査の協力さえ行はぬと聞く。

抑々約束を履行することは道義の問題で、憲法や法律とは次元が違い、もっと高次元のものである。道義というか徳義というべきか、それなくして法規だけで世の秩序は保てない。とはいうものの、我々のように英霊と身近に在った者と、戦後の誤つた教育を受けた者とは英霊に対する心情を異にす。戦後育つた者が政治や文教の中枢に立つ時代になってしまった。我が特攻協会の国民運動も、戦後育ちの者に向つてなさなければならぬ。

靖国神社みたままつり

例大祭に関連し悲観的心情になつたが、みたま祭に出向くと、ほのぼのとした気持になる。本年も7月13日から四日間行はれた。大勢の人出である。たとえ夕涼みがてらでもよい。来た者は必ず神前に掌を合せている。

この行事は21年に長野県遺族会が上京し、境内で盆踊りを繰り上げみたまをお慰めしたのに端を発し、翌年から神社主催で行はれるようになった。今都會では見られないが、盂蘭盆の諸行事を、御祭神も思い起され、御喜びであらうと、心から思う。文責 田中賢一



目次

靖国神社例大祭とみたま祭	1
ビデオの解説文（義烈空挺隊）	2
「知覧特攻基地」より抜	5
遺詠収集についてのお願	10
少年飛行兵特攻隊員の遺書	11
捕虜収容所脱走始末記	19
右の補足説明	22
特攻隊給葉書発刊に因んで④	23
特攻機突入	24
嗚呼!!五月四日	26
富嶽隊遺族みたま祭献灯	26
特潜碑頭彰祭	27
自宅に特攻隊鎮魂碑建立	27
特攻おばさんは語る	28
殉国沖繩学徒頭彰祭	28

義烈空挺隊

ビデオの解説文

前号で第一御楯隊のビデオの解説文を紹介したが、同じタイプに録画してある義烈空挺隊の解説文をここに紹介する。共に特攻戦史の一端として会員に知ってもらう為に掲載するのであるが、ビデオを作成した目的は、世に広く訴えたいからである。どうか会員各位の協力をお願いしたい。

それが為には、沖繩本島の飛行場を敵に与えないことが前提である。

沖繩を守る我が第32軍は、初めの配備では読谷、嘉手納の両飛行場を主陣地の中に抱いていたが、台湾の配備を強化する為、大本営では20年1月沖繩に在る第9師団を台湾に転用してしまつた。第32軍では、残つた2個師団と1個混成旅団で沖繩本島を守るには、両飛行場地区を主陣地内に持つことは不可能であると考え、この地域には警戒部隊を置くだけに止めた。予想したことだったが、この地域が敵の上陸正面となつた。敵はその日のうちに飛行場を手に入れ、2日後には敵観測機が着陸し、3日後から戦闘機が使い始めている。

遺書

昭和二十年五月二十二日

此の度義烈空挺隊長を拝命御垣の守りとして敵航空基地に突撃致します。絶好の死場所を得た私は日本一の幸福者であります。只々感謝感激の外ありません。

敵が沖繩本島に上陸したのは、20年4月1日である。それより先3月25日には慶良間列島に上陸した。これに対し我が海軍の第五航空艦隊（以下5航艦と略称する）は、その前の敵機動部隊に対する攻撃で戦力を使い果たしてしまい、陸軍の第六航空軍（以下6航空軍と略称する）は、まだ集中が未完了で、共に沖繩作戦の初動に対応できなかった。しかし地図を大観すれば判る通り、九州と台湾に航空基地を持つ我が庭ともいうべき沖繩に、敵が飛び込んできたのである。特攻を主体とする航空攻撃で、敵を洋上に撃滅しようとした。上陸を許したが後続を断てば、戦勢を挽回することができると思つた。

幼年学校入校以来十二年諸上司の御訓誡も今日の為のように思はれます。必成以て御恩の万分の一に報ゆる覚悟であります。

拝顔お別れ出来ませんでした。道郎は喜び勇んで征きます。

御母上様

道郎

陸軍の6航空軍は海軍の5航艦と並んで連合艦隊司令長官の指揮下に入り、陸海軍航空部隊が相携え4月6日から6月初めまでの間、十回に亘り航空総攻撃を行った。義烈空挺隊が使われたのは第八次航空総攻撃のときである。

先にも述べた通り陸海軍の航空作戦は、敵艦船に対する体当たり特攻を主体にしていた。ところが大半の操縦者の練度は低く、しかも速度の遅い飛行機までかり出している。沖繩近海に到達するまでに敵戦闘機に要撃され、空しく海の藻屑となつてしまふ。敵戦

彼の父も陸軍の将校だったが、病没して既に亡い。

閩機の陸上基地は読谷と嘉手納である。そこで、義烈空挺隊を使ってこの両飛行場に殴り込みをかけ、一時的にでも基地の機能を封殺し、その隙に敵艦船に特攻攻撃をかけようとした。

阿部忠秋少尉は中野学校出身、義烈空挺隊が当初サイパンのB29基地撃滅に使われようとしたとき、諜報要員として加わり最後まで行を共にした。彼の遺書は藁半紙に鉛筆で無雑作に書いてある。

出撃までの間隊員達の行動については、多くの逸話が残されている。そのいくつかを紹介しよう。全員何かを書き残している。先ず奥山隊長には5月22日付の遺書がある。当初出撃は23日

押啓 御両親様、忠秋ハ本日敵飛行場ニ斬込ミマス、生前何一ツモ出来ズ申訳アリマセン、リツ、高坊ニハ呉々モ宜シク御伝ヘ下サイ、祖父母様ニモ宜シク御伝ヘ下サイ、其レカラ私物梱包一個軍刀一振送りマス、承知下サイ、二十四歳テ玉碎シマス、任官以來御世話ニナツタ方モ沢山アリマスガ略シマス、面白イ話モ沢山アリマスガ略シマス

付記 死後ノ処置ニツイテ
イ金錢ノ貸借ナシ
口婦人関係ナシ

リツチャン 必勝ヲ信ジ 後ニ続くモノヲ確信シ 今ヨリ征ク 何モ出来ズスマナカツタ 元氣デ暮セ
高坊 軍刀ヲヤル 立派ナ日本人ニナレ 負ケルナ 父、母様ヲタノム
神州不滅

真に平々坦々と心のうちを述べている。まだ遺書は沢山残っているが、どれも死を見ること帰するが如く、修業を積んだ高僧を思はせる。次に二、三の出来ごとを紹介しよう。

毎日の激しい訓練を癒すのは入浴だった。飛行隊の兵舎まで行けば浴場があったが、手狭なので町の銭湯に行く者もいた。谷川曹長、荒間伍長、菊田伍長、川崎伍長、中本伍長の五人は

よく連れだつて市内黒髪町の銭湯に行った。訓練の汗と泥でよごれた軍服をまよつていたが、銭湯の女主人堤は「つさんは、この五人を我が子のように慈しみ、茶菓子を出したり繕いものを引受けたりしてくれた。五人は郷里の母や姉を思い出し、座敷に上り話し込んだ。話題は子供の思出が多く、訓練のことや自分らの任務について語ることはなかったという。

そんなことが十回ばかりあった後、五人は胸に落下傘部隊の徽章をつけた最上装の軍服に身を固め、この家の玄関に立った。「小母さん、いろいろお世話になりました。今から出発します。この金はもう私共には使い途がなくなりましたから」谷川曹長が代表してこのように述べ、金一封を差出した。

はつさんは大方の察しはついたがどこに向うのか尋ねるわけにはいかない。涙を押えて見送った。二、三日後に配達された手紙を見て、はつさんは畳の上に泣き伏してしまつた。

おばさん、毎度御無理申上げ誠に有り難くお礼申し上げます。待機中の私達も愈々最後の任務に向い突進致します。私達にいつも親切に慰めて下さったおばさんの気持には感謝のほかありません。私たちも笑つて風に向かい笑つて元気一杯に戦い、笑つて国に殉

じ、笑つて皆様の御期待に報ゆる覚悟です。どうぞ元気に皇国護持の為東亜防衛の為頑張つて下さい。最後に御親切に對し感謝とお礼を申し上げ、御一同様の健康を祈り上げます。
愛機南に飛ぶ 乱筆にてさようなら
谷川鉄男

藁半紙に鉛筆で認め、軍用の封筒に入れて投函してある。日付はないが、撃の日の午前中に書いたらしい。義烈空挺隊のことは連日新聞紙上を賑わした。全員玉碎と聞きはつさんは涙にくれ、何とかあの人達のみ魂を慰めて上げなければならぬと、置いていった七十五円を基金として自宅横の道に面して普賢菩薩像を建て、毎朝拝礼を欠かさなかつた。今ははつさんは故人となつたが、道端の普賢菩薩像は御子息により祀られ香華は絶えない。

もう金はいらぬということに關連して別の逸話を紹介しよう。敵飛行場に着陸して何時間暴れ廻れるか、勿論所持金など必要な筈はない。誰かが飛行機を作る為に国防献金をしようと言ひ出し、近くの者が集まつて金を出し合つてるところを、小柳次一従軍カメラマンが撮つた写真がこれである。

このとき山城准尉が、三途の川の渡賃

位は残しておけと言つたら、地獄の鬼など張倒してしまえと言つた者がいて、大笑したと伝えられている。健軍を發進したが、エンジン故障で引返し河原に不時着した一機がある。そのとき負傷者が出たので病院に入院させ、手拭とチリ紙を買おうとしたが、一文無しで当惑したという話も伝わっている。

不要と思つたのは金錢だけではない。出撃にあたり全員に何日分かの糧食が渡された。それは航空糧食と称し、軽量でカロリーの高いものだった。しかし、こんなに沢山食べるほど生きてはいないと言つて、世話になつた基地勤務員に与えた。この写真も小柳カメラマンの撮つたものである。

5月24日の夕刻、愈々出撃である。当時のニュース映画が残っている。それをお目にかけてよう。
(約一分間のニュース映画挿入)

愈々搭乗、一番機の傍まで進んだとき、奥山は突然諏訪部と握手した。搭乗する場面を撮ろうと随行してきた小柳カメラマンは、予期しない握手だったので撮り損じてしまつた。そこで「済みませんがもう一度お願いします」と頼んだ。奥山はすかさず「千両役者は忙しいナア」と言つたので、まわりの者がドツと笑つた。その笑がおさまらないうちに撮つたのがこの写真

である。小柳氏の証言であるが、この人も既に故人となつてしまつた。

(ニュース映画の離陸の場面)

かくして飛び立った義烈空挺隊の成果は如何に。送り出した側は刻々迫る予定時刻に全神経を集中していた。空挺部隊との連絡は、行動を秘匿するため隊長機の無線機で変針時、本島到着只今突入、の三回だけ報告することになつていた。粗末な臨時の作戦室には、

通信所から引き込んだスピーカーが備えつけてあり、6 航軍参謀長以下関係者が控えている。21時50分予定の変針時に何の連絡もない。22時突入の時刻も空しく過ぎてゆく。神仏の加護を信じ、室内寂として声もなかったが、22時11分俄然「只今突入」とスピーカーが鳴つた。次室に控えていた報道関係者にも伝えられ、ドツと歓声が上がつた。

その頃から我が通信所の傍受班は俄に忙しくなつた。敵は火急の場合生文で発信する。

「北飛行場異変アリ」
「在空中機ハ着陸スルナ」
「島外飛行場ヲ利用セヨ」
「母艦ニ着陸セヨ」

「残波岬ノ90度50湮ニ着艦セヨ」

計画では読谷に八機、嘉手納に四機向うことになつてしたが、無線傍受に

よつて読谷毆込みが成功したと判断された。

翌25日6 航軍では120機の特攻機を準備していたが、天候悪化し発進できたのは70機で、それも沖繩近海が雨の為、目標を発見できたのは極めて少ない。台湾にある第8 飛行師団も同様だった。海軍の5 航艦は前日敵機動部隊の情報を得て出撃した為、25日には殆ど余力がなかった。

敵が読谷飛行場使用停止の解除を放送したのは、27日10時である。従つて二昼夜余り敵飛行場を封殺していたことになる。しかし6 航軍が非常な意気込をもつて決行した義号作戦も、予期の成果を挙げることはできなかった。既に狂瀾を既倒にめぐらす実力は我になかったのである。

沖繩作戦が始つて既に一ヶ月半以上もたった今、特攻機は次々と出撃して行くのに戦勢が一向に好転しないのは、訓練に没頭している義烈の将兵にもよく判つていたのであろう。敵の夜間戦闘機の要撃や対空砲火をかいくぐつて着陸できたとしても、行きつく先はきまつている。にも拘らず、皆朗らかに旅行にでも出かけるように出撃して行った。この写真は奥山隊の宮越春雄准尉の乾杯の時の面影である。悲壯感が全くないのには、見送つた新聞記者

も驚いたと言っている。3 独飛の操縦者新妻少尉は、「待つありて眺むる月の涼しさよ」と書き残している。何故にこのような境地に到達したのであるうか。

昨年12月サイパンのB 29基地に対する特攻攻撃を準備していた頃は、激しい敵心に燃えていた。その頃血で書いたものも数点残っているの、この人達の心情はよく判る。それから五ヶ月後の今、敵撃滅の主役は体当りする特攻機で、自分らはその素地を作る脇役である。そのような立場の違もあつた為か、B 29に対するときのような敵愾心は見られない。それならば心のよりどころはどこにあつたのか、それは棟方少尉が答えてくれる。

入宮前小学校の先生だつた棟方少尉は、出撃直前一人の新聞記者をつかまえて言つた。「私の今生の願いは、もし叶うことなら私の気持を教え子、いや全国の学童に伝えておき度いのです。それは叶はぬことですからここに書き留めておきました」と言つて手渡した紙片には、

全国の学童に寄す
義烈空挺隊 棟方少尉
俺が行く!
俺がヤル!
俺に続ケ!

コノ意気デ進メ

また梶原哲己少尉は次の歌を書き残している。

魁けて梅とわが身の散りゆかば
後に続かん 桜花かな

奥山隊長が弟に書き残した遺書には
散る桜 残る桜も 散る桜
という句がある。

尾見勢二曹長の書いたものには、
征くも残るも皆桜
時こそ連え散る桜 とある。

要するに祖国を護る者、お国の為身を捨てる者が陸続として後に続いているのだという気持が、風光霽月の心境に到達したのであろうか。

現在沖繩の読谷飛行場跡には「義烈空挺隊玉碎之地」と書いた標柱が建つており、また島の南端摩文仁の慰霊公園の中には、義烈と刻んだ大きな石の碑がある。その副碑に刻んである碑文の末尾は「後二続く者ヲ信ジ日本民族守護ノ礎石トナリシ将兵ノ霊ニ我等何ヲモツテ応セントスルヤ」と結ばれてゐる。然るに何ぞ我が国の現状は。

続くものありと思えばものふの
道ひたすらに駆けしをのこら
国のため捧げし血潮汝が身にも
伝はりありと 気付け若人

知覧高女なでしこ会編

「知覧特攻基地」より

(四)

実は出来るなら御宅迄御邪魔致し、何かと御尋ね致したい思ひで居ります。岩井定好本人よりは、

先は御礼芳々御願ひ迄
五月三日
中野美枝子様御許江

岩井 伴一

この書物からの転載は25・28・29号と既に三回に及び、また編集者である永崎筈子さんが靖国神社の社報に出した記事も30号で紹介し、読者から感銘深かったという所見を寄せられているので、その続きを転載させてもらうことにした。写真は会報の編者が入れたもの。

3. 女子勤労奉仕隊員の記録

知覧高等女学校三年 一四歳
特別攻撃隊担当

中野 ミエ子

手紙

拝復 只今は御親切なる御手紙を頂きまして、有りがたう御座るます。厚く御礼申上ます。私は八重子の父です。御両親様始め、御前様には益々御勇健にて決戦下増強また御勉学に御奮励の事と存じます。

御手紙にて承れば、此度愚子、岩井定好事が一方ならぬ御世話様になりました事と存じます。厚く御礼申上ます。御両親様へも宜敷く御伝へ下さい。

最後の通信、元氣で行きます、とのみあるばかりにて吃驚り致し居る処へ、十六日には遺品が届いた様な次第にて、確に十一日の第二次総攻撃にて、海に散った事と存じますが、一目なりと面会が出来たらと、残念に思ふて居ります。只今、私方では、御前様を定好の様に思ふて居ります。何か細い話でも致しませんでしたせうか。

実は、長男千代司が一昨年三月五日に、南島コロバンガ島にて(陸軍高射砲兵曹長)戦死致し、又、今回二男の定好が沖繩にて散り、重ねて涙の日送りであります。昨年七月二十七日に兄の村葬がすんだばかりであります。

定好がどんなに元氣で、出撃に向かひましたかそんな事が今になり案じられて居ります。大勢一緒でありましたか。もう二度と会へないかと思ふと、又しても熱い涙が流れます。写真の御話がありました、一度整理致して後日御送り致しますから、御待ち下さいませ。

御両親様へよろしく御願ひ申上げま

美枝子さん、御手紙をなんどくりかへして読みましても、あきらめがつきません。然し貴方様方の御優さしい御心づくしの桜花、山吹又お人形迄、御手紙を喜んで拝見致し夢の様に思ふて居ります。私も諦めても見たり、泣いても見たり無茶苦茶の日送りです。

昨年長男戦死に際して

国の為め散りし我子にはげまされ老ひて再び土にいそしむ

又二男戦死に

咲く花も時までまてぬ若さくら

けふの嵐にあふぞかなしき

大君にさゝげし我子みなちるも

いくさ勝つとはなんのおしまん

中野さん御笑ひ下さい。

鹿兒島県川辺郡知覧町瀬世向江三六三

中野美枝子様御許江

岐阜県加茂郡上米田村

比久見九七五ノ二 岩井伴一

(注：第一〇三振武隊岩井定好伍長の妹八重子様宛てた手紙に対するお父様の返信)

拝啓 先日のお便り有難う御座るま

した。身に余るお言葉をいたゞきまして、あのかはい、岩井さんが生きてゐたらと思ひました。生きて居る兄さんに、岩井さんにお手紙をいただいたと言ふ事を教へられないと思つて、仏様の前で手紙を見せながら、泣いても泣いても生きて来られませんか。

あの岩井さんは、帽子にお人形さんをつるし、櫓を前にさして行ったのが、よく目にうかんで参りました。私はこの手紙がまいりましたので、おどろいて見て見ますと、岩井と書いてあったので、岩井さんがまだ生きて居て家の方へ帰つて居て手紙をやった(くれた)やうな気がしました。所が名が違つて居ましたので、がっかりして中を見ますと、岩井さんのお父さんであられましたので、うれしくて読んでみましたら感心な事を書かれてあられ、身に余る言葉を有難う御座りました。

私のお母さん達も中を見て、涙をぼろ／＼とながして手紙はびしよぬれになつてやぶれさうになりました。岩井さんも感心な人でござりました。お父さんにて感心な中におもしろい人でした。

岩井さんは、おとなしくて余り私達とは話して居りませんでした、一度たつて途中まで行つて、飛行機のこしようで帰つて来られました。兵舎に

帰って泣いて居たので、私達は、岩井さん、もうしかたがないから泣かないで下さい。たった一日隊長さんにおくれるだけで、隊長さん達に負けたくないやうにして下さいませ”と何度いっても、あゝがっかりした”と言ふばかり、私達は”かはいさうに特攻隊に行く兵隊さんが泣いて行かれるのはかはいさうだ”と言って泣いて居ますと、”もうよい、あなた達が泣かなくてもよい、おれが隊長に負けないやうにやってみせる。しかし神様になつたあの人達が笑つて居るでせう”と言つてやはり思つて(考えこんで)居ました。私達がいくら慰さめてやつても”たった一人残されたのが残念でたまらない。今の今まで遊んだ人と一しよに命をお国に奉つたら思ふ事はないのだ”と言つて居ましたので、”岩井さん、しかたのない事ですから、もう何でも歌つたりして、遊びませう”と言つて、ノートを出して、”何んでも書いて下さい”とたのみましたら、思ひ出のある中にくすぐ書いて下さいました。なんと情深い方でござりましたでせう。

”おれはお父母上様を見たいが、又会つたら母がなげいて一週間ぐらゐ眠らないとかはいさうだから、もう会はない方がよい。自分は見たら死ぬだけだからよいが、後で思ふ人がかはいさうよ。死ぬまでに一目でもばつと妹を見て死にたい”と言つてゐました。一人残されたのが大へんかなしくて、眼には涙が光つてゐました。私などが何時までもくも帰らないので、兵隊さん達が来まして、”早く帰りなさい、暗くなるから”と言つて下さいまして、私達は岩井さんがかはいさうで何時までもくもゐましたら、まつ暗になつてしまひました。”もう帰りますから、岩井さん心配しないでぐつすりやすみなさい。先に行つた人達は靖国で、岩井がゐないといつて、心配してかはいさうにと言つて笑つてお待ちし、よい所を見つけて下さつてゐるでせう”と言つて別れました。岩井さん、家に行きませう”とすゝめましたけれど、”いかない”と言ひましたので、私達は帰りました。

あさ早く行つて見ますと、”おれは隊長さんが、おれがあすつれて行くからと言つて帰つてこられたが眼がさめて見たら居なかつた”と言つて居られました。私達はこんなにまで思つて泣いて居たのかと思ひまして、涙が出ずにはをられませんでした。出撃の日、飛行場に行く時、”こんなに雨が降っていたらお母さん達に電報でもうつてやったら、もう面会して居られたのにね”と言ひました。けれども、”会つ

階級	氏名	出身県	出身別	生年	戦死日
少尉	石切山文正	静岡県	少候24少飛5	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	源善	和歌山	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	板倉三郎	埼玉県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	渡辺英俊	群馬県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	青木新一	東京都	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	内田泉一	鹿児島	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	滝沢新三	鹿児島	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	長家利佐三	福岡県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	宗平誠三	広島県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	城所一三郎	愛知県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	矢島定好	石川県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20
少尉	岩井	岐阜県	操	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	20 20 20 20 20 20 20 20 20 20

第103振武隊(99襲) [編者挿入]

たら又、お母さんが泣くよ、かはいさうぢやないか”と言つて居られました。自動車が出来ず、行く時は、私達をよく見る事は出来ず、敬礼をして別れて行きました。見えなくなるまで、はんかちをふつて別れ、飛行機が出る時まで見送つてやりました。

残さし一人の友 あすは一人で征く独力の体当たり
比子様の武心乗せて残られし友あはれな友
を後にたゞこれだけ書いて別れました。この飛行場は一人で行かれましたので、私達は行くのなら一しよ、生きるのなら一しよに行けたらよかつたのにといつて、かはいさうでした。

御健闘 残りし友
行かれないと、またあんな苦しみを見せう。

お父さま、この岩井さんが生きてをられましたら、どんなおえらいお方になつて下さるで御座りましたでせうね。残念ながらも桜花の如く散つて行かれました事を喜ばねばなりません。

てきましたからね。

ではお体には御注意なさつて下さい。

五月一三日

岐阜県加茂郡上米田村比久見九七五

ノ二 岩井伴一様

鹿兒島県川辺郡知覧町瀬世向江一七六

三 中野ミエ子



のつづく県道が中央を南北に走っていました。松並木の両側は茶や麦や唐芋(さつまいも)畑が広がり、そのところどころに雑木林が点在していて、まるで武蔵野を思わせるような壮大な台地でした。

昭和一四年頃からひそかに調査を進めていた陸軍は、この台地を飛行場とすることに決め、一五年一月には地鎮祭を行ない、一六年に入ってから建設に着手しました。建設のために県下の学生や周辺の町村民が総動員され、毎日数千にも及ぶ人々が土埃りをあげて木佐貫原に取り組む有様は、あたかも大きな合戦絵巻を見るような光景でした。

長びく日中戦争のため物資は極度に欠乏していましたが、日夜をついだ工事は順調に進み、太平洋戦争が始まった直後の昭和一六年一月一日、福岡県雁ノ巣飛行場を飛び立った三機の飛行機が初めて知覧飛行場に着陸し、二四日には太刀洗陸軍飛行学校知覧分校所として開校されました。

4 とうこうえん 知覧特攻基地のこと

赤羽 礼子

(旧姓 鳥浜)

知覧飛行場があった台地はかつては木佐貫原といわれ、どこまでも松並木

を完全武装で堂々と行進する少年たちの姿を見て、知覧町民は、このようなのもしい少年たちがいるかぎり、日本は戦争に必ず勝てると思いました。その時、町民と飛行兵との間に断ちきることのできない心のきずなが結ばれたともいえます。

九五式練習機(複製機で通称「赤トンボ」)による訓練は二月四日から始まり、練習機が飛んでくると、町の人々は農耕の手を休め、また生徒たちは登下校の途中、空を見上げて手を振り、飛行兵たちが励んでいる猛訓練に限りない声援をおくりました。飛行兵もまた機上から、これに答えてくれました。高高度を飛ぶことのない練習機のことですから、その様子は地上から手にとるようによくわかりました。

このような町民と飛行兵との間の友情の交換は絶えることなくつづき、知覧小学校の運動会には飛行学校から多くの隊員が参加し、軍楽隊の演奏会には町民や生徒も加わりました。

知覧は薩摩藩の外城の一つとして栄えた町です。藩主島津氏は他藩とは統治方式を異にして、鹿兒島の鶴丸城を内城(本丸)とし、藩内に一〇二の外城をつくって藩の護りにあたらせました。そして現在も歴史の由緒をとどめる武家屋敷は、今から二三〇年前の第

一八代知覧領主、島津久峰公の時代に造られたもので、屋敷内にはそれぞれ趣向をこらした庭園が母ヶ岳(五一七メートル)を借景して築造されています。

このような長い歴史の面影を残す静かなたたずまいの城下町も、二月四日を境にして、爆音に明け暮れる町に変わりました。

一七年三月八日の分教所の開校式には、町民、学生や生徒、官庁、軍関係者など五万余の人々が知覧飛行場に集まり、航空隊は編隊飛行、急降下、反転飛行などの高等飛行を披露して参加者を喜ばせました。しかし、それから三年後、この知覧飛行場が別離と哀切の特攻基地になろうなどは、町民のだれもが思わないことでした。

一九九年になると、連合軍による反攻作戦は激しさをまして戦局は急速に衰退の一途をたどり、二〇年三月二五日、アメリカ軍は遂に沖縄防衛線の一角である慶良間列島に上陸しました。戦局は最悪の事態を迎えました。そこで軍部は、この退勢を一挙に挽回する方策として、フィリッピンのレイテ湾作戦以来敢行していた特攻攻撃を強化することに決めたのです。特攻攻撃とは、世界戦史上その例をみない、一機よく巨艦を屠る必死必中の体当たり攻撃で

す。

本土最南端の知覧飛行場には、各地から特攻隊員が続々と集結しました。そのなかには、知覧分教所出身の少年飛行兵や学徒出身の特別操縦見習士官の姿もみられました。そして二〇年三月二十七日、軍の要請により、私たち知覧高等女学校三年生も、隊員たちの身の回りのお世話をするために動員されました。

四月六日から七日にかけて第一次総攻撃が行なわれ、同一二日第二次総攻撃、同一六日第三次総攻撃と第一〇次まで特攻出撃がくりかえされましたが、その間にも多くの特攻機が出撃しました。特攻隊員たちは夕暮れの中を、また朝もやについて知覧飛行場を次々と飛び立ちました。戦争が終わるまで、四三二機の特攻機が南の空へ消えていきました。

敗戦後の昭和三〇年九月二十八日、知覧町では、これら特攻隊員の崇高な精神を顕彰するため、知覧飛行場跡に「特攻平和観音堂」を建てました。内部に安置されている観音像は大和法隆寺の秘仏（夢ちがい観音）にちなんだもので、高さ一尺八寸、体内には特攻戦没者の芳名を記した巻物が納められています。

同堂の慰霊祭は、関係者の手によつ

て毎年五月三日に行なわれています。

当日は全国各地から、ご遺族や関係者、当時の知覧高女生など数千の人々が参列します。戦後長い年月を経ていながら、いまなお特攻隊員が人々の心の中に生きつづけているからでもあります。

昭和四十九年五月三日、全国から浄財を仰ぎ、平和の象徴として、大空にそびえ立つ特攻銅像」とこしえに「が建立され、五〇年には隊員の遺徳をしのんで遺品館が銅像のすぐ傍らに建てられました。南の空を凝視する特攻銅像は、日本民族の平和への願いとして、知覧原頭に永遠に輝くことでありましょう。

わずかに二〇歳前後の若者たちは、どのような感懐を抱いて知覧基地を飛び立ったのでしょうか。父母をおもい、兄弟姉妹をおもい、国をおもい、そして永遠の平和を願って征ったのでしょうか。多くの遺品や遺稿が、さまざまなおもいを語りかけてくれるようです。最近では、毎年各地から一〇万人の人々がこの地を訪れますが、ある人は涙を流し、ある人はことばを失って沈黙を守りつづける光景が、毎日のようにくりかえされています。平和に生きる現代の人々に、特攻隊員の死が何かを語りかけているからにちがひありません。

せん。

最後に、「特攻銅像」とこしえに「建立の折に寄せられましたご遺族、関係者の追悼の辞を掲げ、ご英霊の冥福をお祈りしたいと思います。

本日特攻銅像の建立、除幕式を執り行われるにあたり、遺族の一人として感謝と追悼のことばを申し上げます。

申しあげるまでもなく建立された特攻銅像は、先の大東亜戦争においてひたすら祖国の勝利をかたく信じ、一身をも顧みず危地におもむき、遂に酷暑炎暑の戦陣にたおれ、いたましくも散華した若い命であります。

私の夫も若千二十五歳にして南溟の地、沖繩の最も激しい戦いに帰らざる身となったのであります。思い起せば三十年も前であり、当時の手紙の文章にも、話す声にも、一挙手一投足、昨日のようななつかしさがよみがえって参ります。

今日孫も健やかに育ち、元気に遊ぶこの姿を一目でも見せることができたいと思ふと、悲しみを新たにいたします。

このように特攻基地とされた知覧から飛び立った若い命が戦争の犠牲者となった遺族のかたには今どんなお気持ちか、さぞかし色々の思い出が去来し

ていることと思います。

本日は、私たち知覧を基地にした特攻隊の遺族が三十年ぶりに本拠地に特攻銅像並びに特攻遺品館を建立されまして、英霊のみたまを慰め、祀ることができましたことで、諸霊も安んじて瞑せられることと思います。

今度の建立にご尽力くださいましたかたがたに対し、深く深く感謝申し上げます。

ここに私たちは、更たためて特攻隊としてお国のために身をささげ、命をかけて守ったこの祖国が復興全くなり、活気に満ちた街造りと平和の繁栄を見ることができましたのも、そのみたまのご加護があったからであると深く念じてやみません。

今はただ英霊となった遺族が平和を誓い、それぞれの分野でいっそうの活躍と、残された子供や孫が力を合せ、ますます明るい社会の建設と自家繁栄につくすことに全力を用いることを強く誓い、一言関係者に深く感謝を申しあげ追悼のことばといたします。

昭和四十九年五月三日

大平 フク

特攻像除幕式にあたって

平和な日本のみ霊となられました特攻隊の皆様、開聞岳に向って出撃なさいました貴男方のお姿がここに出来上りましたよ。

知覧町の皆様方の心からのお情と、全国からの御力によりまして、除幕式が行われております。

数々の思い出が桜の咲く頃になると思い出し、雨が降ると浮んで参ります。

「出撃の朝は、おふくろの代りに見送りに来てね」と言われました特攻隊の皆様の手を痛くなる程お見送りのしたのも昨日の様でございます。

ネコ嫌いだった浅見さん。

尺八だけは離さなかった河野さん。

左手はケガで包帯して右手だけで操縦桿を持って行かれた中島さん。

「ホタルになって帰って来るからね」と行かれた宮川さん。

まだまだ思い出はつきませんね。

二十年の四月二十八日、出撃の勝又少尉殿は、「僕は人生五十年は生きられないんだ。二十五歳で死ぬ。だから半分はおばあちゃんにあげるから、その分長生きして下さい」と出撃なさいましたね。私は皆様の御年を頂き長生きさせて頂いております。

今日ある日を念願した甲斐ありまし

て本当に嬉しゅうございます。

当時の皆様をお世話した女学生の方々もたくさんおいでになっておられますから、今日はゆっくりと思いの出歌を唄ったりして語り合ってください。私の人生において今日は何より嬉しい日でございます。

これからも命のつづく限りお参りさせて頂きます。どうぞ、やすらかに。

昭和四十九年五月三日

鳥浜 とめ



特攻像を仰いで

皆さま、あの年と同じように今年も桜の花が咲き、れんげの花が一面に咲き乱れ、そして薩南の山山も新緑に覆

われる初夏がやってまいりました。毎年の季節が訪れる度に、私には昭和二十年のあの頃のこと、昨日の出来事のように思い出されてなりません。

当時、知覧高等女学校の生徒で、間もなく三年生に進むという或る日のことでした。本土決戦に備え、連日軍の防空壕を掘っていた私どもに、突然、特攻兵舎での勤務が命ぜられたのでした。特攻隊の皆さまの洗濯や、繕い物、そして食事の運搬、三角兵舎の掃除等がおもな仕事でした。

私がお世話をいたしました三十振武隊の隊長大櫃中尉は陸士出身の方でした。その隊長のもとに、羽をやすめる雛鳥のようにより添う少飛出身の隊員。

また、六十九振武隊は池田隊長を兄貴や友人のようにふるまう学徒出身の皆さんでした。

おおよそ軍隊という、厳しい規律からはみ出したような、和やかで、温かい家族的な雰囲気の間集団だ、と私は思えました。

この方々が一たん出撃されたら還って来ない人たちのだろうか、と思うほど落着き悟りきったような方々ばかりでした。

或る日突然、命令が下り、別れを惜しむ間もなく皆さまは朝もやの中に、また夕刻に、次々に出撃されました。沖繩までの片道分の燃料を積み、爆弾をかかえ、旧式の飛行機で飛びたつて征かれた様子を時折思い出しては胸を痛めることがあります。

その都度、私どもは開聞岳を越えていく機影が見えなくなってしまうから、い



つまでもいつまでも見送ったものでした。見送る女学生たちの目には、自然に涙が溢れてきました。私どもはただ

神の救いをと祈るだけでした。それでもいつか爆音が聞こえ、機影が見えるのでは、とかすかな期待をもって、夕暮れの飛行場に再び佇み、皆さまの帰還を願って耳をすまし、目をこらした日が幾度あったことでしょうか。でも、私どもの願いはむなし、多くの皆さまは遂に還らぬ人となられました。こうして春秋に富むべきはずの若い命は散ってしまいました。

がらんとした兵舎を掃除し、夕食の用意を整えても、皆さまは二度と再びあの勇姿を私どもの前にあらわしてはくたさいませんでした。私どもは主のない兵舎で、煙草をほぐしてお香がわりにたき、はるか南の空に皆様のご冥福を祈って合掌しました。あふれる涙をどうすることもできないで、私どもはただ友達と抱き合い声をあげて泣きました。十五歳という乙女の心には、形容しがたい衝動的な出来事でした。兵舎の外では整備兵の吹く尺八の音があるもの悲しく、とぎれとぎれに聞こえておりました。それは皆さまへの惜別の調べのように胸に深く刻みこまれました。

私どもはこうした悲しみに耐えて今

日まで生きながらえてきました。皆さまをお送りしてから間もなく戦争は終わりました。

あれから二十九年、廃虚と化した国土ではありましたが、皆さまの苦闘は報われました。新しい平和な日本が素晴らしい繁栄をなしたのです。そして、皆さまが若い命をかけて守ろうとされました沖繩も日本に還ってきました。

今日こうして皆さまの尊い犠牲を何時までも忘れることのないよう、多くの方々の浄財で立派な銅像が出来あがりました。歴史は移り変わり、人は変わっていきましても、皆さまのことを何時までも多くの方々が語りつぐことでありましょう。

静かに目を閉じますと、若くりりしいお姿で整列されました当時のままが蘇ってまいります。どうぞこの地にお還り下さい。そして豊かな日本、平和を愛してやまないこの国の人々を何時までもお守り下さい。

昭和四十九年五月三日

永崎 篤子

あとの二編の標題と写真三点は編者が入れたものである。

遺詠・辞世収集に

ついでのお願ひ

当会では、慰霊祭の度に、故人の遺詠辞世の歌を「献吟」として奉納しています。

特攻隊戦没者の方々のご冥福を祈り、長く英霊の偉勲を後世に伝えるべく微力を尽くしておりますが、今般会の事業の一つとして、「特攻隊遺詠集」の編纂に着手致しました。

特攻隊戦没者陸海軍あわせて七千余名、しかるに収集し得た遺詠・辞世は、現在までに一、五〇〇首足らずの状態であります。

そこで、機関誌の紙上を借り、同期、先輩後輩の特攻隊戦没者の遺詠・辞世に關しぜひご協力を給わりますようお願いする事になりました。

ご寄稿の要領は次の通りです。

①陸海軍特攻隊戦没者の遺詠辞世であること

②直掩・誘導中戦死された方々のものも含む

③ご遺族・特攻隊員を敬仰する方の歌であつても可。

④碑・記念碑等に刻まれた作者不明の歌でも可(碑・記念碑の由来を付記のこと)

⑤短歌・俳句・漢詩等の短詩型を主と

し、戦隊歌・隊等は除く。

⑥遺書のような文章は含まない。偈・仏語の程度は構わない。

⑦各詩歌には、隊別・職官・氏名・階級(出撃時)年齢。戦死年月日。戦死場所。等を記載してください。出来れば、どんなエピソードがあつたかもお書き下さい。

⑧原稿はお返ししません。

⑨用紙は任意、特に、歌は楷書でお書き下さい。特殊な読みには註釈をつけて。

⑩収集期間は平成10年12月末とします。⑪疑問の点は事務局まで問い合わせて下さい。

原稿送付先

〒105-0001

港区虎ノ門3-6-8

第6森ビル

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会内
遺詠収集係宛

少年飛行兵

特攻隊員の遺書

故佐藤彰平提供

佐藤彰平氏は当協会の役員として慰霊祭の司会などに活躍され、また少飛会代表として会報の編集や目下作成中の特攻隊員遺詠集にも編集委員となり尽力しておられたが、去る五月二十二日急逝された。この原稿は埋草に使ってはどうかとだいぶ前に提出されたものであるが、故人の意に添う意味で今回年月順に配列し直して全部掲載することにした。

〔比島方面〕

特別攻撃隊富嶽隊（昭和19年11月7日比島沖で戦死）

第十二期陸軍少年飛行兵

宇田 富福（二十歳）

両親にあてたる手紙
父上、母上様には益々元気の事と存じます。其の後は御無音に打過ぎ御心配致された事と思ひます。御許し下さい。

小生事去〇〇日浜松を出発比島〇〇に来て居ります。元氣旺盛任務に邁進して居ります。御安心下さい。

愈々宿望を達すべき時機は来ました。若年乍ら此の榮譽を担ひ、男子の本懐之に過ぐるものありません。ルーズベルトの驚く顔を見て下さい。皇国に生れを受け何等為す所なし、七度生れて君恩に報いん。昭太も元氣で御奉公の事と思ひます。充分体に氣を付け大いに奮闘する様御伝へ下さい。

御祖母様や近所の人々に宜敷御伝へ下さい。

御両親様

特別攻撃隊靖國隊（昭和19年11月24日比島レイテ湾で戦死）

第十期陸軍少年飛行兵

村岡 義人（二十歳）

謹啓 時局愈々重大なるとき、御家内一同様には益々御壮健にて御精勵の御事と遠察致します。

降て義人儀益々元氣にて軍務に勉勵致し居りますれば何卒御放心下さいませ。さて遂に大命を拜し勇躍征途につく事になりました。男子としてこれに過ぎたる慶びはなく誓って御期待に副ひ奉る覚悟に御座います。別に何も書く事はなく、今迄の御教訓をひたすら遵奉致します。

母上様にも愈々御元氣にて末永く御

暮しの事を一へにお願い申上ます。義人 戦死の報入りましたなら、よくやって呉れたと喜び下さいませ。それが一番、義人にとって嬉しい事です。それから、それと日本の母らしく小我を捨てて下さい。

今迄の御高恩唯々感謝の他ありません。

弟妹達にも元氣でよい子よい立派な軍人になるよう御伝言下さいませ。

では暮々も御自愛の程を御願ひ申上ます。

十一月十五日

母上様

特別攻撃隊靖國隊（昭和19年11月24日比島レイテ湾で戦死）

第十三期陸軍少年飛行兵

河島 鉄蔵（二十歳）

御両親様 鉄蔵喜びで忠孝の道を致し一足先に旅立候儀平に御許し度下願上候

世に秀れたる御両親様の山より高く海より深き御高恩伏して感謝し奉り候子として何ら孝養を尽し申さずに心残り有之候へども鉄蔵大忠に趨き大孝に死せりと聞かば必ず御休心下さること存じ奉り候

存じ奉り候

今更申上ぐべき事無之候 御両親様を殘し去る鉄蔵の心情何卒御察し度下候 決して御悲み下さるまじく何処の空に散りぬるも戦の終る迄は米英本土に到り七生仇敵滅亡のみ祈り候はば何卒御了解を。大東亜戦争完結し世界永遠の平和の暁には初めて靖國の社頭に参り膝下に來り永久に仕へ奉り候

親戚皆々様にも何卒宜敷御伝言の程願上候

〔沖繩方面〕

特別攻撃隊誠第三九飛行隊（昭和20年4月1日沖繩で戦死）

第十期陸軍少年飛行兵

内村 重二（十九歳）

重二は特別攻撃隊員として征くようになりました。自分としては本当に待ちに待っていた次第です。事改めて書くようなことはありませんが最後の別れに一筆記しておきます。

時局を認識し、皇國の為には当然のことです。自分はこのために生れてきたような気がします。ただ力のある限りやります。同期生も靖國隊やいろいろな所で壮烈な体当りを敢行して居ります。

我々がやった後に皇土に平和な春が

来ることと思いません。

本当に十九年間、何不自由なく育てて下さったことを心から感謝して居ります。

山岳より重き君と父母の恩―御恩返しに思う存分やって空母または大戦艦をやりますから待っていて下さい。

自分のやったことを聞かれたら、きつと喜んでくださることでしょうハッハッハー

今、自分は何も思い残すことは無い淡々とした気持です。だから父さん、母さんも何も考えずに最後まで頑張ってください。

満州に於ても皇帝陛下より握手をいただき黄色い包の煙草も賜ったものがあります。それに身に余る盛大な見送りや、待遇も受けて只、感激して居りません。内村家の名譽と思つて下さい。トランクの中の品は全部使用して下さい。後で満州から送ってくると思いません。

では皆元気で働き下さい。近所の人々や親せきの方々に呉々もよろしく伝え下さい。

父母上様
兄弟妹様

陸軍特別攻撃隊第二九振部隊(20年

4月8日沖繩で戦死)

第十三期少年飛行兵

寺田 実(二十歳)

長い間色々有難う御座居ました。

只今より征きます。

日本男子の本懐であります。必ず御期待に添います。親類近所の皆様にも呉れぐれも宜敷くお伝え下さい。ではお元気で

飛行第一〇五戦隊(昭和20年4月11日沖繩で戦死)

第十五期少年飛行兵

一 増田 利男(三十一歳)

謹啓

永らく御無沙汰致しました。其の後御両親様始め皆様御変わり無く御暮しの事と存じます。

利男も相変わらず元気にて、愈々最後の御奉公致す秋が参りました。長い間御面倒相掛け何一つ孝養出来ずに征きます事をお許し下さい。国家存亡の秋、我等航空隊の任務の重き事を、御両親様御承知と存じます。利男 特攻隊の一員として沖繩沖の敵艦に向います。

お父さんも大分御年を召して居りますれば無理をなさらず、銃後の務めを

お願い致します。お母さんも、自分の戦死後は決して御力を落さず人生一度生を享けて必ずや滅す。

若くして散る自分を、喜んでやって下さい。

兄上、弟とも逢う事が出来ませんが、忙しき故、御両親様よりくれぐれも宜敷く御伝言下さい。台湾も毎日の空襲にていよいよ其の毛唐共に鉄槌を下す秋がまいりました。

明日は攻撃の日です。今旅館の一室で、はるかに故郷の事を偲びつつあります。

森泉君と台中にて合い、ほんとにびっくりしましたよ。しかし自分達の〇〇進軍にて語る事が出来ずに残念であります。

内地も桜花咲き誇る頃ですね。

自分も其の花の如く散ります。必ずや戦果を挙げて見せますよ。

どうぞ、お父さん、お母さん、お身大切に永く永く末迄御幸運を遠く天上よりお護り致します。

では御健康にて、出撃前の寸暇、一筆申上ります。親類の御一同様に宜敷く願ひ上げます。

二十年三月廿六日 さようなら

御両親様
御一同様

散るために 咲いてくれたか 桜花

散るこそ ものの 見事なりけり

特別攻撃隊第七七振部隊(昭和20年4月28日沖繩で戦死)

第十五期少年飛行兵

中 秀夫(二十歳)

秀夫事、此の世に生を受けてより二十年間。可愛さ一念を以て育て下された大恩は、大空より高く、海より深いものがあります。

秀夫が今迄何不自由なく過し得たることは御両親様の大恩に依る外有りません。今迄大恩を受けるのみで恩返しの一つも出来得ざることを深く御詫び致します。然し秀夫は今その万分の一の恩返しを一命を君国に捧げる事によって出来得ると思っております。

秀夫は決して無駄死にをするのではない事を中家一族によって喜んで下さい。一機一艦を必ずや轟破し御両親様に満足して戴き度いと思ひ今迄頑張りました。必ずや日本一の母にして見せます。

我等同期生、早くも一機一艦を轟破したる者が数名、居ります。我等振武隊も決して負けざる如く最後迄頑張り一命を有意義に捨てる覚悟で有りませす。

御両親様にも何卒、秀夫の働きを見

てほめて下さい。

母上には心配の性質ですが、決して取乱して下さらぬ様にして隊員の母たるの自覚のもとに御身を御大切に永く兄上方より楽しく過して下さい。

その他、口でのべたることを実施下さる度し、最後に中家の万歳を祝つて秀夫、出発致します。

御両親様へ

特攻、出撃直前に

前略

御両親様には年もいって居ります事故、何卒充分御身大切にせられまして、秀夫の成す事を見止めて居して下さい。

又、兄上夫婦に嫌がられる事なく、生命永く楽しく愉快に御送り下さい。秀夫は我が子であつて御国の子で有る

事は承知では有つたと思ひますが、決して取乱されず、軍人の親たる、少年飛行兵の親たる自覚を御願ひ致します。

(中略)

秀夫、亡き後は墓は先般御願ひの小一、兄上の左に一段小さく造つて下さい。

尚、御賜金は飛行機に献納して下さい。

特別攻撃隊誠第一一九飛行部隊(昭

和二十年四月二十八日、沖繩で戦死)

第十三期少年飛行兵

木原 正喜(十九歳)

(鹿児島県始良町蒲生出身)

大君の為に生まれ、大君の為に死するは是、実に男子の本懐にして是に過ぐるものはなし、我が身にして我が身にあらざるとは、我幼少時代より母に痛切に教り、之を信じ、本回出撃出来るは唯々喜びに堪えず。

此処に至り一念の思い残す事は無きも、唯々航空決戦の之秋、航空勢力の如何は国軍国難の命を左右せられると称する之の重局下、我が航空の一員として身を以つて特別攻撃隊の一員として戦い得ることを一方ならぬ喜びと思ふ。

斯くの如く出撃出来るは之実にかつての教官・助教殿、以つて親兄弟、又近親の皆様御教育下されし御蔭と唯感謝感激に堪えず、其の御恩に報ぜんには唯、轟沈を誓つて止まず、必ずや一機一艦を屠り其の御恩に報じます。

昭和二十年四月十五日、誠第一一九飛行隊編成の天命を奉じた時の喜び如何ばかりでありましたろう。

男としての死に場所をようやくにして授けられ、大君の為

祖国の為に莞爾として死んで行きます。

す。

尽忠のしこの御楯と我征かん

出撃出来る此の嬉しさ

昭和二十年四月十六日

御母様へ

幼き頃から彼の御訓育、克く克く身に沁み、其の時期愈々到来、誠特別攻撃隊の一員として一死殉国に奉じます。お母さん、お喜び下さい。正喜、喜んで先立つて行きます

幼い頃からの御訓導、実に身に余り「我が身にして我が身にあらざり」其の時、愈々来ました。

幼き頃、我等子に捧げられし彼の御苦勞、今に來たり、さとり、実に尊きものでありました。御母様有難う御座居りました。

今迄に何等の孝養を捧げる事無く誠に申訳御座居ません。御許し下さい。

唯、今回だけは母上様の御期待にかなう如く御働致します。

正喜、幼き頃の御育ての御苦勞、必ずや報じます。

昔を思うに父亡き後、苦勞を何等さとすることなく、苦勞を御掛け申した事は誠に申訳ありません。御許し下さい。

此の様な事を思うとは、昔を思つては反省致して居り、また此の様な昔思

ひは之だけに止め置き、お母さん、今後御体大切に御暮し下

さい。

さい。

お母さんの写真、兄弟の写真は抱いて突き込みます。

近所の人達く呉々も宜敷く御伝え下さい。

兄弟、皆様へ

正喜、本懐大命に基き大君の為に奉じます。

生前、色々の御指導、唯感謝に堪えません。

云うまでもないと思ひますが、母上様を御大事に御願ひ致します。

之が正喜の最大のお願ひであります。

大誠へ(長兄の子供さん)

大誠、貴様は男だ。立派な男に成り、そして俺の後に続け

家と思ふとき浮び出すのは貴様の顔だ。

男であつたら男に成れ。

亡き父上様へ

「お父さん」声を掛けた事の無き正喜、今度紙上に初めて声を掛けます。之の正喜御喜び下さい。

本回特別攻撃隊の天命を奉じ、大君の為、祖国のために喜んで死んで行きます。

父無き後は母上様、我等兄弟を苦勞

乍らも父上に代わり御育て下さり、よ

うやく正喜、成人、父の意志をつぎ軍籍に身を捧げ軍人としての本分を尽くします。

四月二十八日

木原家御一同様

武士の家に生れ、武に死に得るは正喜、本懐に堪えず、我之の木原家伝来の氣風を守り木原家を代表致し必ず轟沈一機一艦を必ずや屠ります。断じて信じて下さい。

斯くの如く本回出撃、出来得るは幼少より教え導き下されし皆様の御訓導の御蔭と唯、感謝、感激に堪えず。皆様、愈々御体大切に銃後の守りを固からしめられる様皆様の御健康を御祈り致します。

母上様へ

永年の御教え 今に身に余り

雄々しき母の姿 思わる

其の後、御変り無く御暮の事と御推察申上げます。

其の後、小生相変わらず元氣旺盛、今迄に時の来を待つと書いたのも今日此の時のある日でありました。

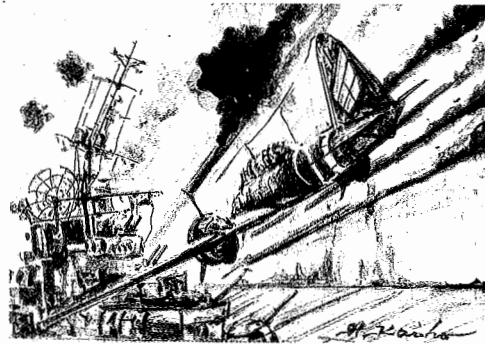
御喜び下さい。

本夕、決戦場に向ひ不帰の者と成ります。

乱筆乱文ではありますが、筆は取れども書く事無し、では之を以て永遠の絶筆と致します。呉々も御体大切に御

暮し下さい。

木原正喜君に捧ぐ 少飛会海法



特別攻撃隊第百十九飛行隊 (20年4月28日久米島西方で戦死)
第十三期少年飛行兵

山沢 四郎 (二十一歳)

元氣一正大の氣一 大和魂之れ即ち皇

国伝統の精神にして万国無此のもの、而も古今に通じて旁薄、我神州に充滿し先人之を体し時に発して巖然たる光輝を放つ。

吾二十有余歳の生を皇国に享け秀麗此なき山水の大自然に抱擁せられ以て

此の氣を飽喫す。何等の幸、何等の感激ぞ。

時に愛機と共に、是に散る依って之を書して遺す。

吾幼時より父母の恩に感謝し育成し来りしも報恩致さず離別せし事遺憾に堪へず、然し任務の前に死す事之運命なりと思ひ静かに黙す。

然し訓練等に於て陛下の大切なる数多くの兵器を毀せしを誠に申訳けなし、更に今操縦せる愛機と運命を共にするは吾軍人として本望なれども、陛下の兵器を毀す事幾重にも申訳けなし。

東京陸軍航空学校、太刀洗及熊谷陸軍飛行学校或は各部隊に於て訓練を受けたる各位殿に対し深く感謝す。

特別攻撃隊飛行第一〇八戦隊 (昭和20年4月28日沖繩、ケラマ列島で戦死)
第十一期少年飛行兵

溝川 慶三 (二十一歳)

御両親様 愈々本日夕出撃の命令が

ありました。御安心下さい。必ずや立派に成功致します。今は出撃二時間前です。我々一行皆朗らかです。私もニコリ笑って行きます。

今はもう総ての俗念も去ってすがすが

がしい氣持です。数時間後には此の世を去るとは思へない程、抱へる爆弾はどす黒く光って居ます。すっかり爆発するぞと云はぬばかりに。

では行って来ます。

皆様 御元氣で さようなら

四月二十八日十五時

御両親様

特別攻撃隊第百二十三飛行隊 (20年5月3日沖繩で戦死)
第十三期少年飛行兵

西垣 秀雄 (二十歳)

拝啓 寸時をさきとお便り致します。暫らく御無沙汰致しておりましたが、今迄の御交情御薫陶を深謝致します。

私も至極元氣旺盛にて男子の死に場所を得たる喜びにて一杯です。此の便りの着きます頃は私は屠竜を繰りて敵大型船と共にさしちがえて大戦果を上げています。大戦果を待つてくださる頃です。も早何も考えません。只郷堂家門の面目にはじざる様やります。後を頼みます。

秀夫

かねてより きめし心は 変らねど

みむねかしこみ 心新たに

(四月十六日 愛機上にて)

第十三期少年飛行兵

安藤 康治(十九歳)

年7月1日沖繩で戦死)

第十四期少年飛行兵

宇佐美 輝夫(十九歳)

特別攻撃隊第五十一振武隊(20年5月11日沖繩で戦死)

第十三期少年飛行兵

豊田 良一(十九歳)

日本男子と生れきて、皇国未曾有の困難にあたり、この五尺の身体で、神州守護の大任につけるは、男子の本懐、これに過ぐるなし。ただ、一機一艦、必中必殺、もって、大空のみ盾と散る覚悟であります。

母の理解も十分ならず、わが希望に向って進みしを深く恥ず。われは、今日のきたるべきを夢見つつ、日ごろ励んで居れり。そしてわれらの同期生は靖国隊を最初として、ひとり、ふたりと散って行った。散るために咲いた花だと覚悟はしていたが、わが番はこない。残念で、仕方がなし。血書も何度か。

大空を拝して征くなり皇国の空のみ盾と われ散らん

特別攻撃隊第五十一振武隊(20年5月11日沖繩で戦死)

第十三期少年飛行兵

島 仁(十九歳)

大日本帝国国民と生れきたるを、最大の喜びとす。今まで育てられたる父母の恩、いかにして報ずべきや。帝国軍人として、戦闘機操縦者として、ある特攻隊員として、空のみ盾として、散る。男子の本懐、これに過ぐるものなし。父母の激励、実に男子として謝す。実にありがたいもの。必殺必沈を誓う。

今日、トランプの占いをしたならば、お母様が一番よくて、将来、最も幸福な日を送ることが出来るそうです。御父様も日は長くかかるが帰ってきて一緒に暮すことが出来るそうです。輝夫は本当は三十五才以上は必ず生きるそうです。が、而し大君の命によって国家の安危の礎として征きます。両親様の御写真と一緒に沈めることはいけないことなのだそう、今ここにに入れて御返し致します。

特別攻撃隊第五七振武隊(昭和20年5月25日沖繩で戦死)

第十四期少年飛行兵

高埜 徳(十九歳)

特別攻撃隊第五十一振武隊(20年5月11日沖繩で戦死)

特別攻撃隊第一八〇振武隊(昭和20年7月1日沖繩で戦死)

毎日、輝夫の行動、操縦等を残らず見ていて下さった御優しい御写真と今日、別れると思うと、実に淋しいものがあります。御写真と御別れしても天地に恥じざる気持にて神州護持に力めます。短いようで長い十九年間でよい事も悪いこともすべて諦め忘れてただ求艦必沈に努めます。

特別攻撃隊第五十一振武隊(20年5月11日沖繩で戦死)

特別攻撃隊第一八〇振武隊(昭和20年7月1日沖繩で戦死)

毎日、輝夫の行動、操縦等を残らず見ていて下さった御優しい御写真と今日、別れると思うと、実に淋しいもの

謹啓 御両親様 永い間御世話になりました。徳儀愈々晴の任務に向ひます。今迄何一つとして御安心乞ふ事が

発表は御盆の頃でしょう。今年は初盆ですね。山を眺めると福島の景が想い出されます。日本一の御母様、何時までも御元気で居て下さい。御父様には別に書きません。蒙古には連絡が取れないと想うからです。では元気に、輝夫は征きます。永久にサヨナラ。翼折れ操縦桿はくたくたくも求めて止まじ敵の空母を沖繩に身ごと突込み散るさくら空母は冥土の途づれに 特攻と散りゆく桜花吹雪 晴れの初陣生還を期せず 御母様へ

出来ず誠に申訳ありません。御許し下さい。

御両親様の慈愛深き御恩絶対忘れません。此の名譽ある大任必ず完遂致します。御安心下さい。御両親様、呉々もお体を大切にせられます様、御健康を御祈り致します。兄上様姉上様近所の皆様にも宜敷くお願い致します。

敬具

御両親様

昭和二十年五月二十日

愈々出発となりました。御両親様永い間御世話になりました。何一つ御安心願ふ事の出来なかつた事が申訳ありません。任務必達に依つて御礼致したいと思ひます。俺の様な者何一つ遺す物もありませんが今迄身につけて居つた物をお送り致します。下館の境屋旅館で下館に居る間御厄介になりました。子と同じに可愛がってもらいました。小包も旅館より送ってもらつておるはずです。

邦雄も文字も早く一人前になつてお役に立つ者になつてくれ。

父母様有難うございました。呉々も御健康に注意してお暮し下さい。

兄上、姉上様にも宜敷 近所の方々にも宜敷く

謹啓 愈々攻撃の日が参りました。

沖繩の決戦正に皇国の興廢の岐路に有る時其の重大責務を担ひて然も新鋭「疾風」を駆つて出発致します。唯念ずるは任務完遂敵艦撃滅の外ありません。此の榮譽此の上も無い特別攻撃隊の一隊となる事の出来ました事は実に御両親様始め東校入校以来お世話になりました諸上司の方々の御蔭であります。心より深く感謝致して居ります。今日は非常に良い日本晴です。私の心気共に此の天気同様すがすがしい気持ちです。任務は必ず達成致します御安心下さい。では乱文にて

敬具

御両親様

特別攻撃隊第五七振武隊(昭和20年5月25日沖繩で戦死)

第十四期少年飛行兵

山下 孝之(二十一歳)

出発に際して

無事目的地に到着致しました。唯今元氣旺盛出発時刻を待つて居ります。愈々此の世と別れです。私は非常に幸福と思ひます。お母さん必ず立派に体当り致します。宮崎の都城これ

が私の最後の基地です。

昭和二十年五月二十五日八時、これが私の空母に突入する時です。

今私は青葉茂る森の中にて過去二十一年を想ひ静かに筆を執りました。私達が沖繩決戦に散華敵艦に突入これを轟沈せば沖繩の戦局は一変するでしょう。私はこれを確信しております。今日も飛行場まで遠い処の人々が私達特攻隊のために色々なものを持ってわざわざ慰問に来て下さいました。斯くも私達に期待し亦人情の厚いのに私は思はず涙が出ました。丁度お母さんのやうな人でした。別れの時は私は見えなくなる迄見送りました。

七時半頃(二十四日)故郷の上空を通つたのです。八代上空で偏向し宮崎に向つたのです。ではお母さん 私は笑つて元気で征きます。

永い間御世話に相成りました。妙子姉さん、緑姉さん、武よ元氣で暮して下さい。町内の人近所の人々にくれくれもよろしく。

お母さん御体大切に 私は最後にお母さんが何時も云はれる御念仏を唱へます。

南無阿弥陀仏

昭和二十年五月二十五日払暁

特別攻撃隊第五七振武隊(昭和20年5月25日沖繩で戦死)

第十四期少年飛行兵

志水 一(十九歳)

謹啓 益々戦局重大となる今日、御両親様には御変わりなく増産に御精進の御事と御察し申上げます。小生十九年の久しき間御苦労のみ御掛申し誠に申訳ありません。戦は実に熾烈を極め我が光輝ある三千年の日本も此の沖繩の一戦にある時が参りました。小生も微力ながら御奉公出来る事を名譽此の上なしと嬉しく思つています。

一生の大事業が今日参りました。自分も日本男子です。きつとやります轟沈を、ニュースを待つていて下さい。自分は敵航空母艦に体当りするものなれば何一つとして残りません。而し此の中にある髪と爪は自分のものですから……。

自分の一生を振りかへりみれば実に愉快でした。自分の思ふ儘の生活そしてやりたい事は我儘で通し、御両親様には実に不幸を致し、此の自分を御許し下さい。其のかわりきつと立派に若桜と散つて行きます。

日本男子として生れ此の皇国の興廢をなす此の一戦に臨めるは本懐とする

処であります。

年は僅か二十歳の身、階級は伍長の身であれど昔ながらの大和魂は小さき此の胸にみなぎってゐます。

御両親様有り難う御座居ました。篤く篤く御礼申上げます。此の便りがとゞゝりても決して決して泣かずにほめて下さい。

この便りが着いて御両親様が読まれる姿を思い浮かべながら此の便りを書きます。

最後に次の事を御願ひ致します。

一、親戚の方に、近所の方々

一、諸先生、雲田、三村、伊塚、岸

本先生

一、村長殿、竹村さんにくれぐれもよろしく、自分は立派に咲いて行つたと、久しい間実には有がとう御座居ましたと御伝へ下さい。

来月に入れば写真がたくさん送られますから一枚ずつ右の方々に出して下さい。

明二十五日午前四時初陣攻撃開始。

ではさようなら。

五月二十四日二十三時走り書き

特別攻撃隊第五八振武隊（昭和20年5月25日沖繩で戦死）

第十四期少年飛行兵

藤山 恒彰（十八歳）

棧 武夫（十八歳）

ん。

昭和二十年四月十八日

御両親様

御両親様 恒彰は君国の為特攻として散つて征きます。もとより覚悟したる所君国の為身命を惜しまぬは日本男子の本懐とする処、私の心にも大なる喜びたる者があります。

十八年間慈愛を以て育て下さいました大恩は散つた後も忘れません。

唯今迄一つとして孝養出来なかつた事が残念です。然し一旦任を命ぜられた以上は心中に何もありません。

敢然と新鋭機を以て敵と刺違へる丈です。

御両親様 私が散つたとお聞きながられても決してお嘆き下さいませぬ。

我が子ながら天晴良く散つたとそれ

丈の言葉をかけて下さい。

私が散つた後も続く若桜が居ると思

えば安心して死んで行けます。

弟も御国の為、立たせて下さい。

君国の必勝を念じつつ征きます。

最後に御両親様始め御一同様の御健康をお祈りします。

御両親様

御両親様 永い間御世話になり有難う御座居ました。武夫は愈々君国の為散つて征きます。

生ある者は必ず亡ぶは当然の事況して皇国護持の大任を果し悠久の大義に生きる事の出来る喜、何に例へる事が出来ましょう。

十九年間慈愛を以て養って下さいました大恩は散つても忘れません。唯此の長い間の御恩に対し何一つとして孝養を尽し御安心を願う事が出来ず申訳ありません。でも最後の忠を孝と思つて御許し下さい。軍人一度任務を命ぜられた以上は心中に何もありません。本日迄磨きに磨いたハヤテを以て敢然と正式空母目がけて突込み撃沈せざれば止まずの旺盛なる攻撃精神あるのみです。

御両親様 武夫が散つたとて決して

お嘆き下さいませぬ。吾が子天晴れ良

くやって呉れたと言葉を掛けて下さい。

皇国が勝つ迄は吾々に続く者の堪えない事を信じて居ります。御両親様二人に喜んで頂く事の出来る此位嬉しい事はありません。

何卒御身体には十二分の注意を払ひ一日も長く国の為御奮闘下さい

之のみ心に念じ神に祈つて止みませ

ん。

昭和二十年四月十八日

御両親様

特別攻撃隊第四八振武隊（昭和20年6月3日沖繩で戦死）

第十二期少年飛行兵

松本 真太治（二十歳）

先便にてお知らせ致しました通り五月二十八日に一回出撃しましたが飛行機の調子悪く引上げました。

鈴木少尉と土屋伍長の兩名のみ決行、隊長以下私もこれより出撃します。

なお富屋食堂の小母さんには昨年十月、奉天の帰還にも御世話になり、当地に来て毎日厄介になって居ります。

出発の時刻、其の他を後報して頂き

ますから宜敷く、ではこれにて

出発直前の記

皆様の御健闘を祈ります。

父上様

追伸

本日突然の命令にて同期の中島軍曹

と二人特別任務を受け出発することとなり

ました。

隊長とは全然別行動にて責務重大、

大いに頑張ります。数多い中で二人認

められ、最後の花を飾ることを喜んで

下さい。
信頼を受けて重要任務を与えられ同
様、中島と征くことは実に本望です。
必ずやります。

還らじと思えば なお燃えあがる

猛き闘志に必沈を期す

敷島の皇国の空の玉垣を

永久に護らな惟神隊

いざ征かむ四海を蔽ふ霧払ふ

御稜威の朝の光仰がむ

〔マレー方面〕

特別攻撃隊七生照道隊（昭和20年7

月26日マレー半島沖で戦死）

第七期少年飛行兵

山本 玄治（二十二歳）

特攻七生照道隊の一員として、愛機

を駆り、必死必中の突入をなし、悠久

の大義に生き、皇国護持の大任を完う

し得るは微臣の本懐是に過ぐるものな

し。皇国の必勝を信じ、烈々たる攻撃

精神のもと、軍人として操縦者として

の死場所を得、数年錬磨の心技を振り、

仇敵空母を我が一撃の下に轟沈せん。

心境淡々として言う所なし。父上様始

るべく、家門の名譽、忠節に生きたる
を御悦び下さるべし、

父上、母上、祖母様、共に御体大切

に、兄姉様を力とし、必勝のため未永

く御暮し下さるべし。是玄治の最後の

御願なり。

利兄上、義枝姉上、定子姉上様、御

友愛の情、感謝の他なし。呉々も活及

定子姉一女殿へは小生使用しありしも

何れにても可なれば御伝へ下さるべし。

川面小林家の血統の絶えざる様御高慮

賜りたし。

尚左に玄治戦死の報を御煩し度

宗村喜介 甲二三雄 大塚まつの

昭和二十年四月二十四日

特別攻撃隊七生照道隊（昭和20年7

月26日マレー半島沖で戦死）

第十五期陸軍少年飛行兵

大村 俊郎（十七歳）

御父様 長らく御無沙汰致しました。

俊郎も至極強健にて操縦任務に献身し

ております故、御安心下さい。内地の

報を（おそらくB29による本土空襲の

激化だろう）耳に致す度に我が胸中は

裂ける思いでいっぱいです。

マレーの状況も日、一日と悪化致し、

いよいよ我々の番がきたようです。

特攻隊員として敵空母、戦艦、轟沈
です。その時を待つのみとなりました。

御父様、俊郎は今日の鎌倉に生れし

ことを嬉しく、且幸福と思っております。

俊郎、生を致してより今日まで何一

つ孝を致さず、而し俊郎一度愛機と運

命を共に致した時は、どうぞこれが俊

郎の最初の又、最後の孝と思ひ下さい。

皇民と生れし我の幸、人間一度は死す

るものなり、黒か白か二つのうち一つ

なり。白き箱に収まりて帰りました暁

は、どうか花の一枝でも立てて下さい。

男子の本懐之に過ぎるものあらん。

敵、本土上陸せば親も子も非ず。只国

に尽くすのみ。

俊郎、靖国の社にて親子対面なり。

噫、壮なり。

我十七歳にして特攻隊員として死ぬ

るか―悠久の大義に生きん―我笑うて

死なん―マレーの夕暮れ、夕陽が椰子

の葉に沈まんとす、我一人遠き故里の

母の顔をまぶたに浮べ、父母の健康を

祈る。願わくば靖国の庭に來たれ。

妹 時枝に告ぐ

わが妹と思えば嬉しく筆を走らさん。

兄として何一つ面倒を見ずして、死す

ることは実に悔ゆる所なり。而し我が

志何か通わん。十五歳なりと雖も今は

子供にあらず、兄無き後は、よくよく

母に仕え、兄の分まで孝行してくれ。

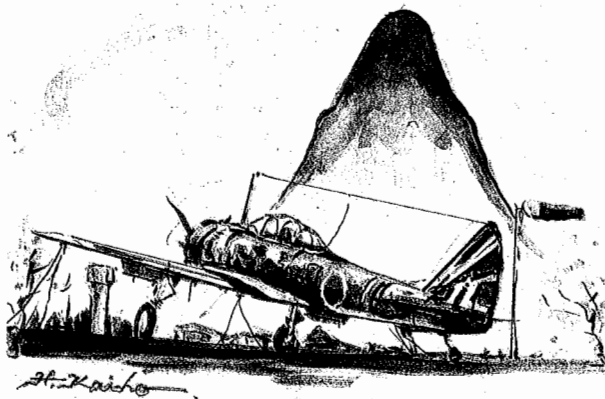
勝子（時枝さんの妹）の指導また大な
り。私心に走る無かれ、本性を理解せ
よ。

国のため何か惜しまん。我が命

死して護国の花と散りゆく

開闢岳よさらば

第二九振武隊に捧ぐ 少飛会海法



瀧口泰弘 (少飛11期) の

捕虜収容所脱走始末記

解説

挺進飛行第2戦隊

島山卓次

少飛24期
青年航空団出身

レイテ空挺作戦の第2挺進団 (通称高千穂部隊) に属する飛行部隊は、新

原中佐の挺進飛行第1戦隊だったが、輸送機が不足するので当時新田原にあつて練成中の第2戦隊から一ヶ中隊を増加することになった。レイテ空挺作戦は19年12月6日に決行されたのであるが、三浦浩大尉の指揮するこの中隊は、その前日夕刻ルソン島アンフェレス飛行場に到着した。

初の計画では三浦中隊の六機はレイテ東海岸のドラクに挺進第4聯隊の宮田中隊を、三機はタクロバンに同聯隊の榊原小隊を降下させることになつてゐた。内地に残つてゐた我々第2戦隊の者にもその部署が伝えられたので、そのように行はれ全機未帰還と理解してゐた。ところが次に述べる瀧口泰弘君の証言で、三浦中隊長は激しい対空砲火を受けての落下傘降下は不可能と思ひ、全機着陸に変更せざるを得ない

と決意し、居合せた4航軍の参謀に申立

てそのような指示を出してもらつたとい

う。そのとき4航軍の参謀は特攻隊と認定すると言つたと証言するが、特攻隊としての手続はとられていない。

私はこのときの詳細を「特攻会報」に投稿し、12号と13号に掲載してもらつたので、もう一度目を通して頂けたら幸である。

さて、こゝに紹介する瀧口軍曹はドラッグ飛行場に強行着陸する筈だったが、海上に撃墜されてしまった。それから先のことを「捕虜収容所脱走始末記」と題し、一昨年私のところに送つてよこした。敵に捕えられても烈々たる気魄を失はない登場人物に敬意を表し、何れ何かに投稿しようと暫く温めてい

るうちに、昨年11月17日突然彼の訃音に接してしまつた。早く出せばよかつたと悔やまれてならない。なお文中に出てくる宇田さんとは、同中隊の宇田信夫少飛8期で一昨年故人となつた。もう一人の柴田とあるは百式重の機上機関と出ているので、95戦隊差出強行着陸機の少飛11期柴田繁光軍曹であらう。

捕虜収容所脱走始末記

瀧口泰弘

昭和十九年十二月六日、レイテ島ドラッグ飛行場に強行着陸を命ぜられた私は、湾内に碇泊してゐた数百隻の敵艦船に猛烈な対空砲火を受けて、機体は炎上、自身は三発の爆傷を受けて、百米余の低空からレイテ湾に墜落した。海面に激突と同時に機外に放りだされ、十七時間漂流し、意識不明のまま米軍に拾われて、巡洋艦に移され手当を受けて、一命を取り留めた。

その後、野戦病院をへて、重傷のまま捕虜収容所に移された。収容所内には同期生の柴田と、先輩の宇田さんがいた。柴田は重爆撃機の機上機関員で、宇田さんは操縦者である。聞くところによると、柴田は同期生の近藤の操縦

する百式重爆撃機で、同じく対空砲火を受けて炎上、海上に不時着水し生存者は海に飛び込んだが、接近した駆逐艦からの機銃掃射を受け、海中から拳銃で駆逐艦に応戦したが及ばず、近藤他、隊員は戦死。彼は最後の一発で自決を計つたが、銃口を口にくわえて発射したが、その弾は頭蓋骨を突き抜けて大きく傷が裂けていたにもかかわらず、海に浮いてゐた遺体は駆逐艦に引き上げられて息のある柴田は治療の結果、奇跡的にも命を取り留めた。強運

のつかない不死身と言ふべきか、負傷の後遺症のため口もとが不自由ではあつたが、それにもかかわらずさぶる元氣であつた。宇田さんの機は、同じく被弾後、海岸に不時着陸、敵地上部隊の攻撃を受けて応戦、全員戦死したが、これも彼一人頭部に弾創を受けたが、衝撃で倒れてゐるところを米軍に見された由にて、頭に包帯をしてゐたが、これもさぶる意氣軒昂であつた。

この収容所内で、私達は脱走を計画した。アメリカ兵の監視の目を盗みつつ事ある度に作戦を練つたのであるが、何分にも私は墜落の衝撃で脊髄を潰してベットに寝たきり、歩行も困難な有様であつたので、計画は出来上がったものの中々実行する機会を巡つて来なかつた。

そうする中に日は流れて、ルソン島もアメリカ軍に占領されたと伝わつたが、私は依然として起き上がることは出来ず、又当時アメリカ軍の方針として、高級将校と操縦者は傷が治り次第、豪州の収容所へ移送されてゐたので、宇田、柴田の二人は近々その可能性多しと判断、もはや私の回復を待つ余裕はないとして、彼等のみ決行することを決めた。

深夜0時脱出、とすべての打ち合わせを終え、私のベットに忍んできた二

人は

「滝口よ お前を連れて行くのは無理だ。先に行く、歩けるようになったら後から来い、ダグラス機を乗っ取って台湾迄飛ぶ。明日の夜は台湾で一足先につき焼きでショット一杯やってるからな」

「瀧口無理せず早く治してこいよ」

こもこも言い残し、かたく私の手を握って幕舎の横にある排水溝から抜け出して闇に消えていった。

明け方まで、私はまんじりともせず、外の気配に耳を澄まし続けていた。動くことの出来ぬ自分が口惜しく、ただ全身全霊で二人の成功を祈り続けるより他はなかった。

何時間たつたろうか……明け方近く、白々と明るみ始めたところ、突然、横手の椰子の木すれすれに一機の大型機がエンジン全開の猛烈な音を立てて超低空で北に飛び去った。(やった、やりおった!) 喜びに全身が震え、動けぬベットの所で声にならない声で叫びながら、極度の緊張のあとの脱力感から私は何を考えることも出来ず、しばらくは茫然と目を閉じていた。

「テンコ(点呼) テンコ」と米軍のサージャンが慌ただしく駆け込んで来た。捕虜の人数を数えて立ち去り、又来ては数え、何度も何度も同じことを

繰り返しては何やらけたたましく叫んでいたが、それももうつつのうちに聞いて、いつか眠ってしまっていた。……(成功した! やった!) ……だが信じ

て疑わなかったその夜の脱出の成功も、後から聞けばそれは私の思い違いで、偶然といおうか運悪くといおうか、同じ日の同じ時刻、米軍内で起きた別の脱走騒ぎで、米軍搭乗員が、ダグラスを乗っ取って離陸したものと判明した。当初、米軍内でも、まさか身内の所業と思わず、てっきり日本人捕虜の脱走と思ひ込み、所内の員数を点呼で二名の欠員を確認したと言ふことである。その日の午前中に、所長のアバキャン大尉が通訳を伴って私のベットにやってきた。

「お前はパイロットだろう」

私はばれたな、と思った。

「そうだ」

「なぜ嘘を言った」

「アメリカに本当の事を言う必要はない」

「お前も彼の二人と同様に逃げだすのだろう」

「それは分からない。今は歩けないから駄目だ」

「治れば逃げるんだらう。お前には逃げる事が出来ないように、歩哨を付けて特別に監視をする」そう言つて、

即日、収容所の中央の空き地に、天幕を張り、椰子の木を打ち込み、鉄条網を二重に張りめぐらした。私を容れるための特別監房である。

脱走した二人はその時点ではまだ行方が分からず、飛行機の奪回に失敗して、ニッパ林に逃げ込んだと専らの噂であった。ところがその日に大騒ぎが起きた。

日本兵の一人が抱えきれぬ程のタバコ、缶詰等を抱えて所内に帰ってきたからである。

何故、彼だけが……? 真相は直ぐに判明した。脱走した二人と私が同じパイロット仲間だったことが米軍に知られたのは彼の密告によるものだったのだ。

私が所長に尋問された結果、特別監視を受けるはめになったのはそのためだったのである。傍らに居合わせた熊本師団工兵の一人が(この人はさる有名な博徒の親分で、背中に派手な入墨をいれていた)

「貴様、それでも日本人か?」

と叫んで、手元にあったつるはしをつかむや、その密告者の日本兵に振り下ろした。狙いは外れてつるはしは地面に突き刺さったが必死で抱き止めた監視のアメリカ兵二世が、

「何をするか」

「こいつは裏切った」

「だが彼はアメリカ軍の為に役立つてくれたのだ」

「いいや、裏切り者は許されない。俺がやらなくても、必ず誰かがこいつを殺す」

アメリカ兵は慌てて将校となにかをささやき交わし

「彼はアメリカに協力したので、我々は彼を保護する」

と云って彼を連れ去っていった。結果は私を入れる為にこしらえた鉄

条網の中に彼を入れ、歩哨を立てて、彼を我々日本兵から保護することになった。お陰で私は孤立して監視されるのを逃れることが出来たのだ。

だが治療には日数がかかり、この事件でパイロットであることが分かってしまったものの、その後は尋問を受ける事なく、軍属と言ふことで日をすごしていた。

それから数日後、一人の将軍がMPと多くの将校を従えて所内巡視に来た。寝ていた私の足元で立ち止まり、所長の説明を受けている。「パイロット たぎぐち」とだけは分かるが、英語の不得手な私には何を説明しているのか分からなかった。巡視が終わった後で「いまのはマッカーサー司令官である」と公表された。先に公表すると、

マッカーサーと刺しちがえる日本兵があるかもしれない、というので警戒した為とのことである。

それから更に一ヶ月程たったある日のこと。銃弾にやられた負傷兵が運ばれて来た。それが宇田さんであった。右胸部貫通銃創である。心配しながら居ると、「滝よ」と宇田さんが私のベットの横に来てしゃがんだ。笑いながら「やられた。失敗した。だが敵機を焼いたよ」と簡単に言った。アメリカ兵の噂でも聞いてはいたが、ここで宇田さんの話をまとめると、脱走して飛行場に行った時、警戒は薄く、ダグラスに乗り込んでエンジンを始動しようとしたが、日本の飛行機と異なり、エンジン鍵が必要なので、どうしても始動が出来ず、その場は一旦諦めてニッパ林にひそみ、翌日の深夜、再び飛行場に行ったが、ジープで巡回するアメリカ兵に発見され、ニッパ林に逃げ込んだ。その後は警戒が一段と厳しくなり、飛行機を奪回しての行動は不可能と判断したので、隙をみては飛行場に行き七機を焼いた。それまでも何度かアメリカ軍の天幕に忍び、食糧と弾薬、銃、手榴弾を盗みだして、米軍幕者を襲いカービン銃を打ちまくって暴れてたと言う。

ニッパ林に潜んで襲撃を繰り返して

いた二人は、物資、弾薬も豊富となり、しかも状況にも慣れて来たので、ある日、手に入れたアメリカの軍服を着て二世になりすまして堂々と道路へ出て、収容所の近くまで歩いて来たのだが、他のアメリカ兵は騙せても、収容所勤務の顔見知りのMPにばったり出くわしたのが運のつき、一目散に逃げ出したという。その時に受けた銃撃で、宇田さんは右胸部貫通、その場で倒れ、柴田はニッパ林に向い逃走したが、林の寸前で銃弾を受けて倒れ、這うようにしてニッパ林に入ってしまったという。

宇田さんが私の所に来た時は、撃たれて三時間程しかたって居なかったが、自力で歩いて来て、貫通した胸と背中のバンソウ膏を張っただけで、口より吐く唾液に血が混じって居るといいうのに、驚く程元気があった。「何で、このこと出て来たの」と聞くと「柴田が、滝口はどうなっているのだろう、見に行こう」と言ったのだそうである。やがて宇田さんに所長の尋問が始まった。

「何故逃げた」

「戦争をしているからだ」

「また逃げるのか」

「幾らでも逃げる」

「今度は警戒を厳重にして、歩哨も増やし逃げられないようにする」

「歩哨を増やしても一人や二人叩き殺しても逃げる」

米軍の所長はびつくりして、直ちにルソン島のモンテンルバ刑務所に飛行機で本人を送った。

その後、収容所の中では死刑になつたとの噂が立ったが、戦後二十数年して宇田さんに会うことが出来た。モンテンルバに送られて、何か死ぬのが厭になり、気遣いの真似をしつらしい。そこでアメリカ軍は真偽を確かめるために色々と検査を行ったそうだ。脊髄に注射をしては、正常であれば我慢出来ない程痛いのらしいが、痛さを顔に出せば嘘がばれるので、本人は平然とニヤリニヤリ笑って見せたのだと言う。だがその苦痛たるや死ぬよりもひどいものだったと、つくづく述べ懐かされていた。

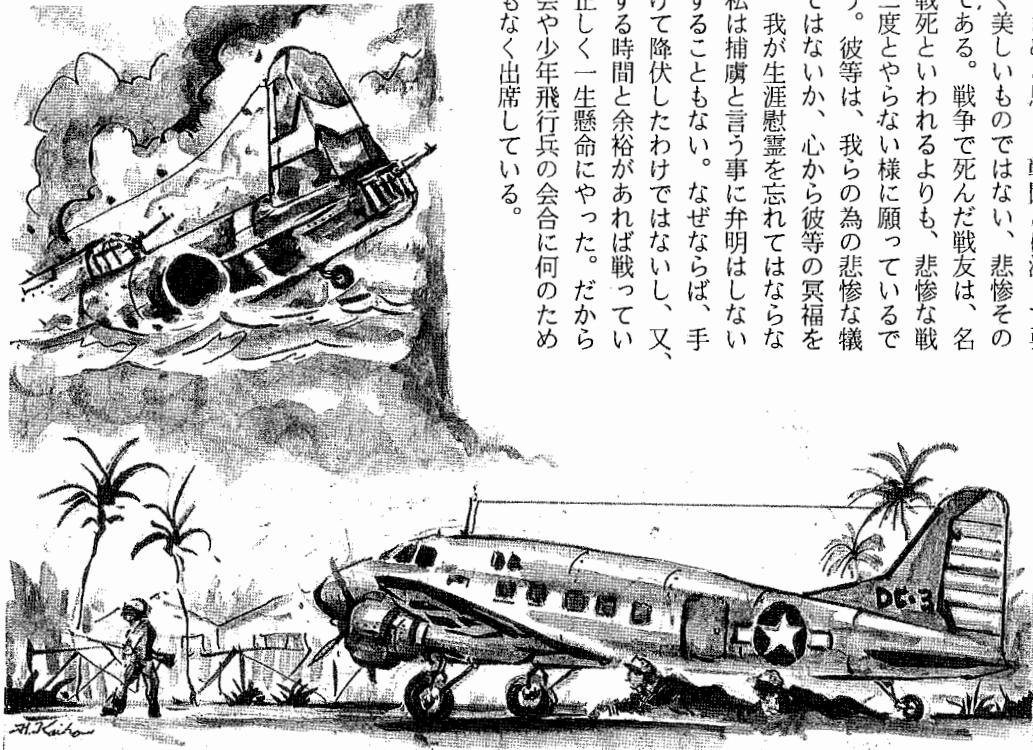
柴田は戦後も復員しておらず、あのニッパ林に逃げ込む時に受けた銃弾で死亡したのであろうと思う。

旧軍隊教育の中に戦陣訓なるものがあった。「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」とある。戦国時代の葉隠れ武士道の引用であろうが、私はこれを否定しない。ただしこの短い文面は如何なる状況に宛て嵌まる文面なのであるのか疑問を感じる。

宇田、柴田、両人の採つた行動は恥じるべき行動か、罪禍の汚名を残したと言えるだろうか、個々の判断の違いはあると思うが、敵機を焼打ちした行動は勲章に値すると私は判断する。

又収容所で起きた事ではあるが、京都の師団で敵の上陸に備えて、レイテ湾沿岸に半年の歳月をかけ敵上陸に対して陣地を構築したところ、一夜明けに海に浮かぶ数百隻の艦船に驚き、一発の弾も発射せず山に逃走した幹部がいた。残った兵は、声もどろく肉弾戦で全滅したが、一人の兵が砲弾の破片を脚に受けて倒れ、米軍に運ばれ手当を受けていて、隻脚ではあるが生存していた。八月十五日終戦となり、山に逃げて居た将兵が続々と投降してきた。その中に逃げ出した幹部も居た。彼は得意満面に「俺達は天皇陛下の命令で山から降りてきたのだ」と胸を張って言った。これを聞いて負傷をして捕虜となった同部隊の兵が怒り、「殺してやる」と、蕃刀を持って彼を切りにかかったが、幹部は一目散に逃げだし、米軍の保護を求めた事件があった。戦闘の激しさには強弱があるが、基本動作の繰り返しではなく、戦争ごっこではない。予期せぬ状態が起きているのが常識であり、その激しさの中で全知全能を尽し目的の為に邁進する

のみ、戦う本人は無我夢中であつて、
 “死を顧みず”とか、“勇猛果敢”な
 ど言うのは経験のもたない第三者の言
 葉にすぎぬと思う。戦闘とは決して勇
 ましく美しいものではない、悲惨その
 ものである。戦争で死んだ戦友は、名
 譽の戦死といわれるよりも、悲惨な戦
 争を二度とやらない様に願っているで
 あらう。彼等は、我らの為の悲惨な犠
 牲者ではないか、心から彼等の冥福を
 祈り、我が生涯慰霊を忘れてはならな
 い。私は捕虜と言う事に弁明はしな
 い。臆することもない。なぜならば、手
 を挙げて降伏したわけではないし、又
 自決する時間と余裕があれば戦ってい
 る。正しく一生懸命にやった。だから
 同期会や少年飛行兵の会合に何のため
 らいもなく出席している。



少飛会海法秀一画

(補足説明)
 タクロバンとドラッグが
 攻撃目標となった経緯

敵上陸から一ヶ月後のレイテ島内の
 戦況は、脊梁山脈東部の平野部は、完
 全に敵に占領され、カリガラ湾添いに
 西進して来た敵の鋭鋒を、第一師団が
 リモン峠で必死になって拒止していた。
 マニラに在る方面軍が、11月23日に決
 定した「和号作戦」では、35軍は26師
 団をもって脊梁山脈を横断してブラウ
 エンに進出し、東部平野における攻勢
 のきっかけを掴もうとするものであつ
 た。これに対し4航軍の立てた「テ号
 作戦」では、第二挺進団(高千穂部
 隊)をもってブラウエン地区の三つの
 飛行場に降下作戦を行い、「和号」に
 参加しようとするものだった。

その頃レイテ島内で敵が使用してい
 る飛行場は、ブラウエン地区の三つの
 ほか、レイテ湾沿いのタクロバンとド
 ラッグがあった。猛威を振っている敵
 航空を封殺するには、ブラウエンだけ
 でなくタクロバンとドラッグも目標に
 すべきであるという意見が、高千穂部
 隊の両聯隊から出された。ブラウエン
 は和号作戦の目標に入っているので、
 地上部隊と提携可能なノーマルな空挺
 作戦であるが、タクロバンとドラッグ

は敵後方の要衝で、最終的な勝利を収
 めない限り提携の見込みは全くない。
 それに輸送機も足りない。挺進団長徳
 永大佐は決しかねていた。

それまで手持の輸送機は、挺進飛行
 第一戦隊の三個中隊二七機だった。飛
 行戦隊は高千穂部隊のいるルソン島の
 アンフェレスに過早に進出することを
 避け、台湾の嘉義に留っていたが、新
 田原で練成中の第二戦隊から一個中隊
 が増加して、追及したという報告を受
 けた。それが、滝口軍曹らの所属する
 三浦中隊である。

輸送機が三二機になったので徳永団
 長も決心し、二目標を追加することを
 4航軍に具申した。4航軍では早速テ
 号作戦の計画を変更し、新に第五飛行
 団に、強行着陸機として百式重四機の
 差出しを命じた。

高千穂部隊の両聯隊では、タクロバ
 ンとドラッグに向う部隊を特攻隊とい
 うことで人選した。挺進第三聯隊の某
 曹長は、強行着陸の百式重に乗ってい
 て、レイテ湾に落ち捕えられたが、戦
 後述懐している。ブラウエン降下部隊
 も輸送機が不足し、各中隊とも第二次
 に廻された者が多勢いた。それが特攻
 隊募集と聞き、我先に志願した。自分
 もその一人だった。(田中賢一記)

特攻隊絵葉書発刊に因んで

④

—それらの絵にひそむもの—

伏 竜

て敵の侵攻を破推し
 ようとする海軍当事
 者の決意と、それに
 応えた伏竜隊員の精
 神に敬意を表し、そ
 の間に殉職した英霊に追悼の誠を捧げ
 る。

伏竜特攻隊の編成経過

絵葉書の作製にあたり、水中特攻は
 特潜と回天の二種を採った。これらは
 進んで敵を求めて攻撃するものである
 が、水中特攻の中には待ち受けて敵が
 来たら攻撃するものもある。それには
 海竜と伏竜があり、これらも絵葉書に
 して広く世間に紹介したいところであ
 るが、今回は製作費の都合で八枚に限
 定したので、割愛せざるを得なかつた。
 伏竜についてはこの会報に体験者の投
 稿文を次の通り四回掲載した。

昭和20年4月5日、伏竜の実験段階
 であつたが、指導員確保のための潜水
 訓練、講習が行なわれ、5月23日から
 は特攻関係者が続々と対潜学校及び情
 島に着任するようになった。
 伏竜の編成、配備は全海軍を挙げて
 実行に移され、中央から各鎮守府管下
 の防備戦隊を通じて次の命令が出され
 た。

横須賀防備戦隊命令 機密横防23
 号(5・6)

- 一 横須賀防備隊司令ハ水際特攻隊
 用各種伏勢陣地二関シ速ニ研究ヲ
 了シ之ヲ成果ヲ報告スヘシ
- 二 右二関シ横須賀海軍警備隊司令
 官、横須賀海軍砲術学校長、海軍
 対潜学校長、横須賀海軍航空隊司
 令、横須賀海軍施設部長、第二海
 軍火薬廠長、横須賀海軍軍需部長
 ト協力スヘシ

12号伏竜特攻訓練余話 門茶鷹一郎
 〃 伏竜の像遊就館に奉納
 13号伏竜部隊の訓練と反省平山茂男
 14号伏竜部隊と私 石野 博
 以上をもう一度繰りてもらえば伏竜
 の全貌がお判りと思うが、これらの記
 事だけでは、終戦時までどれほどの
 部隊が作られたかが述べられていな
 いので、「特別攻撃隊」なる書物で、
 その事を述べている箇所を抜粋して
 みる。実戦に使はれた部隊ではないの
 で成果のほどは不明だが、万策を竭し

横須賀海軍工作学校長及横須賀鎮

守府聯合工作指導官ハ左ニ依リ、
 伏竜隊用酸素瓶成ル可ク多数製作
 スヘシ

(イ) 製作要領横作校設計ニ依ル
 (ロ) 完成期日概ネ八月末日迄

伏竜隊の編成は海軍対潜学校と対岸
 の横須賀海軍工作学校及び情島、川棚
 等で進められた。六月初旬ごろ第71嵐
 突撃隊司令予定者として海軍大佐新谷
 喜一(本部は野比)が着任、第81突撃
 隊では、特攻長海軍少佐平山茂男が5
 月着任(本部は軍隊「日向」、戦闘部
 隊として伏竜隊の編成が本格化した。

7月18日、軍令部から発出された伏
 竜隊の配備計画は次の通りである。
 伏竜隊急速整備展開要領(機密第525
 号)

一 要旨：
 主トシテ敵上陸用船艇ヲ水際ニ奇
 襲スルノ目的ヲ以テ本兵力ヲ急速整
 備、予想来攻正面ニ展開ス

二 整備兵力及配属区分
 (イ) 整備兵力
 10月末展開整備ヲ目途トシ次ノ
 兵力ヲ整備ス

横 鎮 兵 鎮 佐 鎮 舞 鎮
五ヶ大隊 二ヶ大隊 二ヶ大隊 一ヶ大隊

(ロ) 配属区分

大隊毎ニ予想来攻正面突撃隊ニ
 配属スルヲ建前トシ其ノ配属区
 分ハ別命ス

伏竜隊の編成計画は次の通りであつ
 た。(防研資料による。但し5月の段
 階ですでに訓練編成を開始していた部
 隊もあった。)

横鎮(第1特攻戦隊に伏竜隊として
 第71突撃隊を編成) 久里浜で訓練編
 成)

7月15日〜8月10日 一ヶ大隊
 8月5日〜9月5日 一ヶ大隊

9月1日〜9月20日 二ヶ大隊
 第81突撃隊を編成) 情島で訓練編成

8月1日〜9月9日 一ヶ大隊
 9月1日〜9月30日 一ヶ大隊

佐鎮(第8特攻戦隊の川棚突撃隊に
 伏竜隊を編入) 川棚で訓練編成

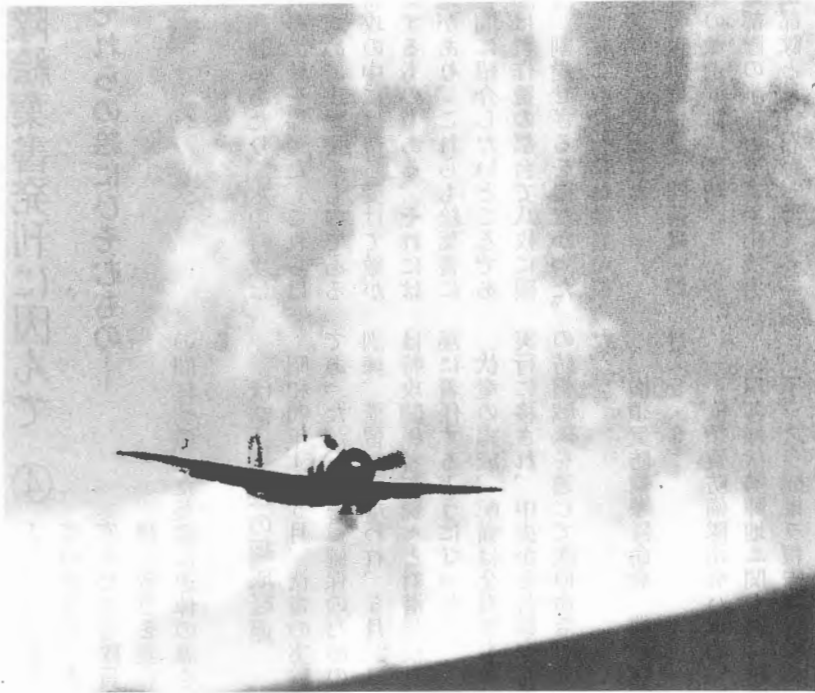
8月10日〜9月9日 一ヶ大隊
 9月1日〜9月30日 一ヶ大隊

舞鎮(舞鶴突撃隊) 横鎮へ派遣訓練
 8月5日〜9月5日 一ヶ大隊
 右のように伏竜隊はその一部を編成
 しただけで、実戦に至ることなく終戦
 を迎えた。

昭和19年11月25日 比島方面

特攻機突入①

米国発行の「第二次大戦の空軍歴史写真」なる書物より数点を抽出し、特攻烈士闘魂の進りを偲ぶこととする。



米空母エセックスに突入寸前の我が特攻機



頭上の飛行機は敵か味方か？
ミンドロ島進攻時の同艦の兵員達。恐怖に満ちた表情

当日は比島各地に機動部隊機の攻撃が猛烈であった。特攻各隊は機動部隊を求めて出撃した。この日散華した特攻勇士は、第3神風特攻隊第3高徳隊植竹上飛曹以下五名、同吉野隊高武中尉以下十二名、同笠置隊鮎川中尉以下五名、第5神風特攻隊疾風隊前田上飛曹以下八名、同強風隊山口上飛曹以下六名の計三十六名である。この攻撃は

猛烈で空母4隻等に重大な損害を与えている。翌26日には米軍機の活動は低調になった。

20年5月11日

沖繩方面

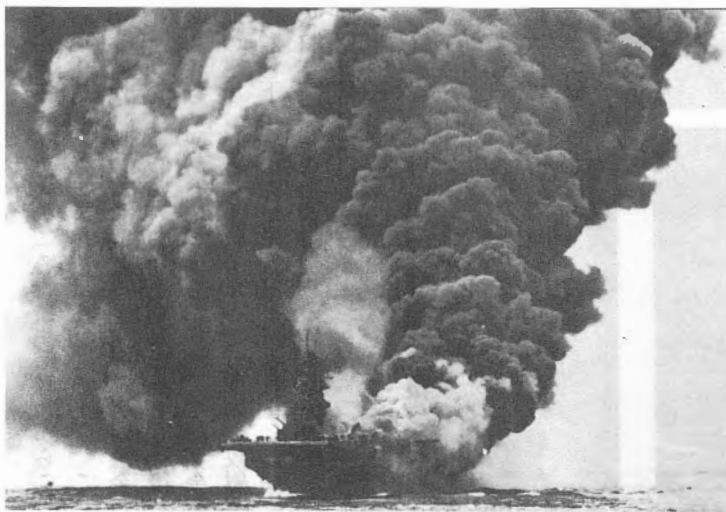
5月11日早朝、小雨をついて特攻隊は出撃した。陸海軍の戦闘機約九十機の掩護が部署されたが、やはり敵戦闘機に妨害されて突入は困難を極めた。

その困難をおかして散華した海軍特攻隊員は次のとおりである。鹿屋から第8神雷部隊桜花隊(桜花三) 高野中尉以下三名、同攻撃隊(陸攻三) 古谷中尉以下二十一名、第10建武隊(爆戦四) 柴田中尉以下四名、第6昭和隊(爆戦二) 根本少尉以下二名、第7昭和隊(爆戦六) 安則中尉以下六名、第7七生隊(爆戦) 上月飛長、第六神劍隊(爆戦四) 牧野少尉以下四名、第五筑波隊(爆戦九) 西田中尉以下九名、串良から菊水雷桜隊(天山十) 今井少尉以下三十名、宮崎から第9銀河隊(銀河六) 深井中尉以下十八名、そして指宿から第2魁隊(水偵二) 四方中尉以下五名、以上百二名五十機である。陸軍では知覧から誠第41飛行隊の山田軍曹、第44振武隊の岡本少尉、第49振武隊小坂伍長以下二名、第51振武隊荒木少尉以下七名、第52振武隊下平軍曹以下三名、第55振武隊黒木少尉以下三

名、第56振武隊朝倉少尉以下三名、第65振武隊から桂少尉以下三名、第70振武隊佐久田少尉以下三名、第78振武隊の湯沢少尉、都城東から第60振武隊の倉元少尉以下三名、第61振武隊橋本少尉以下三名、以上97戦八、1式戦十六、三式戦六、4式戦六、計三十六機である。この日6航軍は八十機の特攻機を用意したが、空爆下の飛行機整備困難によって出撃が妨げられていた。



1945. 5. 11. 沖繩・九州間で作戦中、空母バンカー・ヒルは30秒間に2機の神風機に攻撃され、燃料と爆弾に引火した。息が詰まる程の炎や破裂するロケット弾・爆弾と戦う勇敢な乗組員達は、戦死又は行方不明392名、負傷者264名の犠牲を出した。



他の艦から撮った、被弾直後のバンカー・ヒル。

嗚呼!! 五月四日

日本郷友連盟副会長

五反園敏男

五月四日、NHKのテレビはケタタマシイ警報音に続き、沖縄全域に津波警報が発せられたことを繰返し繰返し報じた。更に九州から四国・和歌山県・兵庫南部にまで津波注意報が放映されたのである。幸いにも何等被害が出なかったことは何よりであった。

ところで今から五十三年前の五月四日、田良浜にあった指宿海軍航空基地から特攻機が大挙出撃し、二十歳前後の若人が沖縄周辺の敵艦船群に突入して散華された因縁の日でもある。

昭和二十年四月一日、圧倒的優勢な敵兵力が沖縄本島西海岸（読谷、嘉手納）飛行場正面に上陸し、地上戦闘が開始され、牛島中将率いる第三十二軍との間に熾烈な死闘が繰り返されたのである。

四月六日より陸海軍航空部隊は四月末日に至までの間、陸海軍合わせて一〇二八名、六五〇機が散華した。水上偵察機二機も含まれている。

五月に入り、敵の重圧下にあった我が第三十二軍は攻勢に転ずべき日を五月四日と定め、陸海航空部隊に可能な

限りの協力を要請した。

作戦機を使い果した海軍は水上偵察機の特攻出撃を決意、鹿屋基地から桜花隊五十六名、指宿基地から水上機特攻四十名等百二十六名、四十五機、桜花六を編成した。陸軍も整備中の作戦機を掻き集めて四十五名、四十五機、陸海軍合わせて百七十一名、九十機、桜花六を以て出撃し、陸軍は敵艦隊群に突入した。戦果は挙げたけれども第三十二軍は攻勢に転ずることが出来ず持久戦に入らざるを得なくなった。

その後も指宿基地から五月十一日に五名、五月二十四日三名、二十八日七名、六月入ってから二十二名と出撃している。この中には水上機特攻隊員八十名が含まれていた。

沖縄の戦闘では陸海軍合わせて三千二名の特攻隊員が約千九百機の特攻機により散華されている。その殆どが鹿屋、知覧、国分、十三塚原、串良、出水、指宿、古仁屋、万世、嘉界島、徳之島等鹿児島県内特攻基地から出撃したのである。これらの基地跡には夫々慰霊碑が建立され、慰霊祭が行はれている。

昭和四十六年五月二十七日、旧基地通信室壕跡の上に「指宿海軍航空基地哀惜の碑」が建立され、水上機特攻隊員と基地戦没者の部隊・氏名を刻んで

ご冥福をお祈りするとともに、この海軍祈念日に毎年指宿かもめ会（元海軍軍人の会）が主催して慰霊祭を行っている。

しかし遺族を始め、関係者の老齢化が進み、また特攻隊を知らない世代の増加によって慰霊顕彰事業の風化が危惧される昨今である。

わが国の防衛意識の高揚、英霊の顕彰、栄えあるわが国の歴史伝統の継承助長を三つの柱とする、防衛庁監督下の国民運動組織である社団法人日本郷友連盟の鹿児島支部では「鹿児島県内特攻基地と慰霊顕彰」という冊子を作成し、県内各市町村・各図書館、各学校に寄贈している。

五月四日の夜半、急に目覚めて今日の地震、津波のこと、そして特攻作戦のこと、指宿基地特攻出撃のことが脳裡を巡った。

それもこれも特攻隊戦士が後世に伝えよとの暗示ではなかったのか、思い巡らして一文を記した。

(要約) 木村元正

特攻富嶽隊遺族 靖国神社みたま祭に献灯

今年の「みたままつり」からこのような献灯が掲げられています。これは富嶽隊遺族及び同隊帰還者が醸金し、永代献灯料を奉納したので、今後とも永続して掲げられます。なお募金額が目標を上廻ったとて、我が特攻慰霊協会に昨年三万円寄付されました。これらの事務は遺族の曽我睦郎殿がなされています。



指宿航空基地の碑



特潜碑顕彰祭

団体、地元代表等総数三百名に及ぶ参加者で碑前は身動き出来ない程であった。

特潜関係戦死者四四〇余柱を祭る「特潜碑」は、昭和45年に呉港沖倉橋島の訓練基地に隣接する八幡山神社境内に建立された。毎年5月第三土曜日に例祭、三年ごとに大祭を行ってきた。

加へて、真珠湾、オーストラリアのシドニー、マダガスカル島ディエゴスワレスに赴き、残留艇体の捜索、慰霊碑建立、慰霊祭執行等につとめていたが、会員の高齢化により八幡山神社に碑の永代祭祀を依頼する事となり、神社側の快諾を得たので、特潜会主催の顕彰祭は本年度が最終催行となった。

尚、明年以降は神社主催の顕彰祭を従来通り5月第三土曜日12時30分より行はれる。

この日5月16日は、前夜来の雨が時に篠つく雨に風も加はる程の悪天の中で行はれる事となったが、参加者は北は青森、宮城、南は鹿児島、沖縄、はては遠くイタリー在住の会員が夫人同伴で参加するなど、約四〇名近い御遺族を中心に、海上自衛隊呉地方総監杉山靖樹海将以下、幕僚長、監理部長、幹部候補生学校長、第一術科学校長、第一潜水隊群司令、第一練習隊司令等呉地方の海上自衛隊首脳来賓及び関係

式は二二三〇の開始、祭主八幡山神社加藤宮司の下に諸神事が進行され、一三三〇頃軍艦旗降下をもって終了。

引き続き行はれる特潜会解散パーティーの会場ビューポイントくれホテルへ、音戸の瀬戸、清盛塚、海自潜水艦基地、元戦艦大和建造の第四ドック等を眺めつつバス移動であった。

パーティー会場は、当初世話役の想定した参加数を大幅に上廻る事となり会場の拡大に苦労された様であったが、遠隔地からの参加や久しぶりの参加者等で次第に盛り上がり、最後には、海ゆかば、特別攻撃隊の歌で終幕となった。

(回天会 河崎)

自宅に特攻隊鎮魂碑建立

宮崎日日新聞昨年12月14日記事の
写真と文面

綾町(宮崎県東諸県郡)小島忠良氏
戦友の冥福を祈る

旧日本陸軍の特攻隊員だった小島忠良さん(71)が、綾町入野の自宅敷地内に特攻隊鎮魂碑を建立。十三日に小島さんの少年飛行学校の同期生や、戦死者の遺族ら約百人が参列し、除幕式があった。

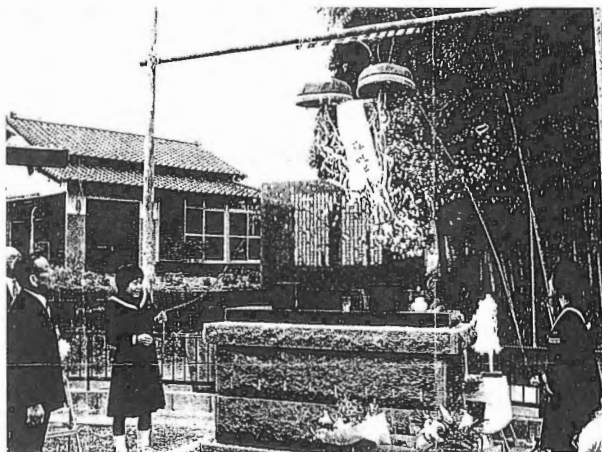
除幕の後、孫の若山恵さん(14)と川崎佑佳さん(13)がくす玉を割った。

遺族会の代表が玉ぐしをささげ、出席者が鎮魂歌「海行かば」などを歌い、若くして戦死した特攻隊員のめい福を祈った。石碑は高さ、幅約二メートル。小島さんの少年飛行学校の同期生、大村俊郎少尉の辞世の句「国のため 何かおしまん 我が命 死して護国の 花とちりゆく」が刻まれている。

小島さんは陸軍少年飛行学校卒。パイロットになってから一九四五(昭和二十)年八月に、敵艦に体当たりする必死の任務の特攻隊員となったが、終戦で九死に一生を得た。

脳梗塞(こうそく)や胃がんを病みながら、建立にこぎつけた小島さん。「辞世の句を残し、笑って別れを告げた戦友たちが思い出される。日本の繁栄は彼らの犠牲の上に成り立っているのに、今の社会はすすんでいる。もう一度日本人のあるべき姿を考えてほしい」と思いを語る。

(平成九年十二月十四日 日曜日版より原文のまま転載)
少飛15期大村俊郎伍長・七生昭道隊



昭道隊

特攻おばさんは語る

9 ページに掲載した鳥浜トメさんの式辞の中に出てくる人について、朝日新聞西部本社が鳥浜さんの語ることを取りまとめて出した「空のかなたに」という本の、関係箇所を抜すいてみる。

左手はケガで包帯し右手だけで操縦桿を持って行かれた中島さん
中島さんが知覧に来られたのは、たしか二十年五月二十五日頃のことでした。少年飛行兵で同期だった仲よしの松本真太治軍曹と一緒に軍用トラックで私の食堂にきました。ちょうど店先に出ていた私をみつけた中島さんは、「おばさん」と叫んで、トラックから飛びおりようとしたとき、バランスを崩して転げ落ちました。そのとき左腕をくじいてしまいました。

中島さんは、その前の年の秋ごろ、台湾の部隊に戻る途中、知覧に十日ほど立ち寄りしました。そのとき、毎日のように私の食堂にやってきて顔見知りになっていたんです。きつと久しぶりの再会に、興奮していたのでしょね。ねんざは思ったよりひどく、真っ白い包帯で首から腕をつっていました。再び食堂に現れた中島さんに「治って

から出撃しやんせ」と申しましたら

「大丈夫。命令が出れば、いつでも行きますよ」といわれました。テレビの「遠山の金さん」に出てくる高橋英樹さんのような男らしい人ですね。背も高くて口ヒゲがとも似合っていましたよ。

六月二日の昼ごろでした。食堂にきた中島さんはねんざでふろに入れないため汗くさくてね。たまらずふろをわかつて背中を流してやりました。「こんな体じゃ出撃できませんよ」といいますと、「日本が勝つためには、自分は一刻も早く行かねばなんのです」といいました。まだ十九歳の少年がですよ。思わず涙が出ましたね。「おばさん、泣いているのか」といいますので、とっさに「ちょっと腹が痛かもんごわんで」といってごまかしました。中島さんが自転車のチューブで操縦かんに左腕をくくりつけて沖縄海域に出撃されたのはその翌日でした。

(中島豊蔵軍曹 少飛二期 第48振武隊、6月3日散華 19歳)

僕達は人生五十年は生きられないんだ。二十五歳で死ぬ。だから半分はおばちゃんにあげる。と言って出撃した勝又少尉
そのように言ひ残して出撃されましたが、その後信じられないようなことが起こりました。

戦時中に盲腸をこじらせて腹膜炎を起こしました。この時の手術跡が戦後も悪化してしまつてね。高熱が続いて「もう助からん」と家族は思ったそうです。半年は入院しましたが、生命をとりとめました。

昭和三十年、五十三歳のとき子宮がんにかかりましてね。病名は知らされず、「もうよか」と手術後二週間ですっきり退院しました。担当医はがんの転移を心配して家族に「入院がだめなら通院でもして放射線治療をしないと命が危ない」といったそうですが、それっきり病院には行きませんでした。その後何ともありませんから治ったのでしょう。

七年ぐらい前、自宅近くの県道の横断歩道を渡ろうとして、右からきた乗用車にはねられました。地面に投げ出され、運転していた人は「早く病院へ」と大声をあげた。だがけがはどこにもなく、かけつけた人もびびくりしておりました。

勝又さんは、酒が好きですね。飲心と口ぐせのように、勝又勝雄が(特攻で)行くのだから日本は必ず勝つというてました。死んでいく悲しさを酒にまぎらせていたんです。

(勝又勝雄少尉 特操二期 第78振武隊、5月4日散華 22歳)

殉国沖縄学徒顕彰

五十三年祭

本年も沖縄慰霊の日にあたる6月23日に、靖国神社で行はれた。主催したのは国士館大学金城和彦教授が代表者となつている殉国沖縄学徒顕彰会である。行事の詳細については既に三回も本誌で紹介したので重ねては述べないが、祭文を奏上するのはいつも若い学徒である。今回早稲田大学学生の松下文彦さんの奏上した祭文のうちで、我々の琴線に触れる部分を紹介する。

……この諸先輩の勲しは、本来ならば我等大和民族の魂として、深く心に刻まるべきものであります。しかしながら誠に残念なことに、諸先輩の国に殉ぜられた尊きお姿は、その後今でも国民に殆んど顧みられない嘆かわしい時世であります。

……しかし私共の世代は、こうした歴史を学校で教えられていないため、散華された方々を犬死呼ばはりする人さへあります……

「新たな時代の我が国を担う私共若者にとつて学ぶべきは、諸先輩の御姿をおいて他にありません……」

文部大臣よ、文部省の役人よ、この祭文を読んだら何と応うるや。我が協会も若い人に語りかけねばならぬ。